
あたしの弟は魔王サマ！？

天原ちづる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしの弟は魔王サマ！？

【Nコード】

N 8 7 3 5 B

【作者名】

天原ちづる

【あらすじ】

尾上千歳は大学二年生。徹夜で古典のレポートを仕上げていたはずなのに、垂直落下式スリルライド気分を味わって、たどり着いたのは陰気な地下室。そして目の前には、天使も裸足で逃げ出すくらいに可愛いお子様が。なんとこのお子様が、魔王陛下だと言います。魔王陛下の姉の生まれ変わりだと告げられた千歳は、果たして無事に日本に帰れるのか！？

第1話

ねえ、あなたは魔王って単語に、どんなイメージを持ってる？

強面のバケモノ？ カッコイイお兄さん？

それともナイスバディのお姉サマだったりする？

今ちまたでは異世界召喚モノって流行ってるから、いろんなタイプがあって一概には言えないと思う。

けどさ、そういうのって大抵、異世界に跳ばされた人になったりするもんだよね？

なのにあたしの役割は魔王の姉だっていうんだよ。

夢にしても微妙な役柄だと思わない？

というか、そんなのんきに夢見て寝てる場合じゃないんだよ！

明日提出のレポートがまだ終わってないんだってば！

これ落とすと単位もらえないから！

夢なら覚めてよ！ ヤバイんだって、いや、マジで！

どうも皆様、こんばんは。昼間だったらごめんなさい。

一人称小説ならではのお約束。自己紹介に入らせていただきます。

あたしの名前は尾上^{おのえ} 千歳^{ちとせ}。

ギリギリ十代の大学二年生です。

専攻は日本文学。趣味がWEB小説漁りで、特技は毒舌。

性格は中学生時代の失恋から顕著になったけど、割と偏屈と言われる。

偏屈なんて言葉、普通の女子大生には使われない表現だけど、自覚もあるから無問題。

えーと、あと、どんなことを話せばいいのかな。

ああ、今あたしが置かれている状況か。

古典のレポートを仕上げるため、徹夜二日目でパソコンに向かっていたハズなのに、なんだか知らんが、いきなり開いた穴に落っこち

た。

気分はあれだ、遊園地にある高い塔の周りに座席があつて、落ちるヤツ。

垂直落下式スリルライド。

ただし座席も安全バーもございません。

絶叫系が嫌いなあたしは、乗ったことなんてないけどね。

で、スポンと飛び出した先に待っていたのは、豪華絢爛な大広間で、……じゃなくて、なんだか陰気でかび臭い、地下室のようなトコ。ガサガサという不吉な音は、聞かなかったことにしたいです。

ありえない状態に周りを見回してみると、五、六歳くらいのお子様と目が合った。

ところがどっこい、このお子様はそんじょそこらにいるようなお子様じゃあなかった。

とにかく可愛い。マジで可愛くて愛らしい。天使も裸足で逃げ出すくらいに。

こんな子が街中を歩いてたら、すぐに変態にさらわれちゃうね。思わず連れ去っちゃうくらいに可愛いから。

そのお子様があたしを見て、にこつと本当に嬉しそうに笑った。うわぁ。反則でしょ！ その笑顔は。お姉さん鼻血出ちゃうよ！

「姉上！」

はい。

……じゃなかった。

徹夜二日目の頭は、まともに回転なんざしてくれません。

テンションがおかしいのは、きっとそのせい。

いつもはもっとクール……なハズ。

くらくらする頭で、そんなことをぐるぐる考えてたら、天使よりも可愛いお子様が、両手を広げて駆けてきた。

けれど徹夜二日目で垂直落下式スリルライドを生まれて初めて体験したあたしは、勢いよく飛びついてきたお子様を抱きとめることができず、見事に体勢を崩して後頭部を床に強打。

そのまま夢の中で夢の世界へ、ハイさようなら、した。

第2話

夢の中で夢を見るつても何か変だけど、あたしは夢を見た。
壮絶に可愛いお子様が「姉上、姉上」ってあたしの後をついてくる夢。

あたしもそのお子様を抱きしめたり、本を読んであげたり、とても可愛がってた。

現実にも弟妹が一人ずついるけど、こんなに仲睦まじくはない。

口を開けば喧嘩腰。あたしの毒舌が鍛えられたのは、きっとこのおかげだ。

まあ、別に仲が悪いつてわけじゃないけど。

だから、まあ、夢だと思っても恥ずかしいわけですよ。

こんなにラブラブ？ な姉弟は。

ああ、起きなきゃって思う。

レポート、あと少しで終わるし、締め切りは午後三時だから、死ぬ気でやれば何とか間に合うかも知れない。

あの教授、レポートだけで成績を判断するから、これをしくじると、今までマジメに講義に出席してたのが、骨折り損になるんだよね。それだけは避けたいわ。

ぱちつと目を開けると、布が見えた。

何度か瞬きをして、どうやらそれが天蓋てんがいだと分かった。

天蓋付ベッドなんて、初めてだよ、あたし。

寝返りを何回打つても落ちなさそうなのこのサイズ。

キングサイズっていうの？

シーツは清潔で真っ白だし、よく陽に当てたのか、いい匂いがする。ただし難点をいえば、枕が高すぎるのかな？

あたし、ぺっちゃんこの枕でしか、安眠できないんだよね。

部屋にはテレビで見た外国のお金持ちがコレクションしているようなアンティーク調の家具があって、あたしの部屋のゆうに十倍はあ

る広さだ。部屋の中で徒競走くらいできそう。

ふと、すーすーするなあと思ってた自分の体を見ると、家にいる時にいつも愛用している高校のジャージじゃなくて、真っ黒のノースリーブのワンピースを着ていた。

肌触りが最高に素晴らしい。これは絶対合成繊維なんかじゃない天然モノだろう。

えーと、ていうか、ここ、どこよ？

夢から目覚めたらまた夢でした、ってか？

おいおい。早く起きないと、ホントに単位落とすよ、あたし。

こりゃ、気合を入れて起きねばね。

うーん、夢から目覚めるには、どうしたらいいのかねえ。

行儀は悪いけど、ベッドの上であぐらをかき、うんうん唸っているとドアがノックされた。

起きてるのに黙ってるのも何だし、返事した方がいいのかな？

「はい？」

「姉上、起きた？」

ガチャリとドアノブが回って顔を出したのは、あの天使の上に行く可愛さのお子様だった。

その後ろには、眉間にくつきりシワを刻んだお兄さん。

折角の美形なのに、その不機嫌な顔で五割は損してる。

そっいうのがいいってご婦人もいるんだろうけど、あたしは嫌だな。こっちまで気分が沈みそうな表情だ。

「姉上？」

とてててと犯罪的可愛さのお子様、ベッドの側に駆け寄ってくる。

う、走り方まで可愛い。

っていうか、えらくリアルな夢だな。こんなにリアルな夢は初めて見たよ。

いつも変な夢ばかり見るもんな。

ゾンビ犬に追いかけられたり、サメに襲われたり、ギニー特戦隊がマンシヨンの上に出現したり。

…… ホント、ろくな夢見てないな、オイ。

「あゝ、あれか？　いくら若いからと言って、徹夜はやっぱし駄目だったか」

昔から徹夜って苦手なんだよね。

「姉上？」

「睡眠って大事だね。何せ人間の三大欲求の内の一つだし」
ちなみに後の二つは食欲と性欲だ。

「姉上！」

「早く起きてレポート書かなきゃ」

たっぷり寝た後のように頭がスッキリしてるから、きつとはかどることだろう。

「姉上ってば！」

「は？」

夢って触覚あったっけ？　確か痛覚はないんだよね？

天使も裸足で以下略なお子様が、ぎゅっとしがみついてくる。

不満気に口を尖らせて、あたしを上目遣いに睨む。

可愛い子ってどんな表情をしてても可愛いということを、この日学びました。

「さっきから姉上は独り言ばかり言っで。僕の話は聞いてくれないの？」

「は？　えゝと、あの、さっきから姉上、姉上って言うけどさ、あたしにこんな可愛らしい弟はいないハズなんだけど……」

あまり可愛くない弟と妹ならいるけどね。

あたしがそう言っで、天使も以下略なお子様は首を横に振った。

「ううん。姉上は僕の姉上だよ。ちゃんと分かるもの。キュレオリア姉上の魂だ」

「あのさ、あたし、キュレなんたらとかいう名前じゃないんだけど」
尾上 千歳っていう、立派な名前があるんですけど。

やっぱり夢だね、展開がワケわかんないし。

「そんなことないよ！　僕が姉上の魂を間違えるなんてあり得ないもの！」

天使以下略お子様がきつぱりと言い切った。

大した自信だな、オイ。

ぎゅつと天以下略なお子様にしがみつかれるのは悪い気はしないけど、今は夢なんて見てる場合じゃないんだよね。

こういいうい夢は、もっと余裕のある時に見たいもんだわ。

第3話

姉上だ。

いや違う。

という不毛な論争に終止符を打ったのは、お子様の後ろに背後霊よろしく張り付いていた、不機嫌そうな美形の兄さんの一言だった。

「陛下。そろそろ執務に戻られませんと。今日中に裁可願いたい懸案がいくつもございます故」

「え〜！ もう少しいいでしょ？ ジュトー。折角姉上と再会できたのだから」

お〜、兄さんの顔は好みじゃないけど、声はものすごく好みだわ。つて、陛下？ このお子様が？

ぎゅうつと首にしがみついてくるお子様と、ジュトーと呼ばれた兄さんを交互に見て、その素直な感想を口に出す。

「はあ？ 陛下ってこんな小さい子が？」

しかも王座に座っているだけじゃなくて、なにやらこのお子様が政務をしてるような口ぶりなんですけど？

不機嫌な顔の兄さんは、あたしをジロリと睨みつけて言った。

「魔王陛下は御歳百六十歳であらせられる」

は？

すいません。あたし今、信じられないことを二つ聞きました。

まずはこの天使も裸足で逃げ出す犯罪的可愛さのお子様が、実は魔王陛下であるということ。

もう一つは、どう見ても五、六歳くらいにしか見えないこのお子様が、御歳百六十歳だということ。

おいおいおい。いくら夢でも無茶な設定だろうよ、そりゃ。

夢って自分の記憶を整理するために見るっていうけど、こりゃないでしょ。

「夢なんかじゃないってば！」

はいはい。

夢の住人って、必ず否定するんだよね。お約束。

あ、そういえば夢の中でまた寝ると、起きられるんだっけ。

それに思い至ったあたしは、豪華天蓋付ベッドに横になった。

目をつぶってブランケットを頭まで被る。

お休みなさい。

って、痛エ！ 重っ！

「ぐえっ」

ついつい女子大生にあるまじき声を出しちゃったよ。

頭を出すと、魔王陛下があたしのお腹の上に、ていつと腹這いになつていた。

丁度あたしと陛下で+の形になる感じ。

あの、重いんですけど……。

「もう！ 姉上、無視しないでよ！ 折角また会えたのに。僕、姉上に会える日をずっと待ってたんだよ？」

魔王陛下はぶんすか怒ってらっしゃいますが、この際、そんなことはどうでもいいです。

重要なのは、痛覚を感じたこと。

もしかして、いやにリアルなのは、現実なせいですか？

ホントにリアルだったりするんですか？

「うっそ！ マジで！」

今更ながら慌てて自分のほっぺたをつねる。

「いひゃい」

うわぁ……。

ガツクリと肩を落としているあたしに追い討ちをかけるかのように、不機嫌な声が降ってきた。

「馬鹿か」

その言葉はあたしの心にクリティカルヒット。

もう駄目です。HPゼロだわ。

がつくしくるけどね、ここでヘタレてる場合じゃないし。

沈んだら沈んだだけ、浮上しないと。

さっさと帰らせてくんないかなあ。

このまま一生帰れないパターンと、行ったり来たりするパターン。

あたしの場合はどっちだろ？

っ！か、マジで帰りたいんですけど。

「え」と、陛下。いくつか質問があるんですけど、よろしいでしょうか？」

実年齢が百六十歳だという魔王陛下に、ついつい敬語になっちゃう。はたから見たら五、六歳のお子様に敬語使うのは、変に見えるかな。ああ、どうせ偉い人だから、敬語でも問題ないか。

「うん、いいよ姉上。でも僕のこと、ちゃんと名前で呼んでくれたらね」

え？ 魔王陛下の名前なんて知らないんですけど……。

無茶言うな。このお子様が。

お願いします。そんなキラキラした期待の目で見ないでください。

心の中で謝ったり怒ったり、まあちよつと混乱中。

なかなか答えないあたしに陛下はちよつと不満気だ。

「姉上、もしかして僕の名前、忘れちゃったの？」

「忘れるも何も、初対面なんですが」

こんな可愛いお子様に一度でも会ってたら、絶対忘れないって、普通。

「むう。ホントに？ 覚えてないの？」

うわっ、今度はうるうるですか！？

止めてよ！ まるであたしが泣かしたみたいじゃん！

どうしよう！ ウチのチビ共が泣いてたら、泣き止むまでほつたらかしくけど、さすがにこんな可愛いお子様を、ほつとくわけにもいかないよねえ？

これがもし街中だったら、あたしに非難轟々だよ。

まるで犯罪者を見るような目つきで見られちゃうって！

あの！　っていうか、陛下、ホントに百六十歳ですか！

百六十歳って、もっと老成しててもいいじゃないんですか！
何でこんなことで泣くのよ！

あぁっ、もう！

抱きしめて慰めればいいんだか、そんなことしたら失礼なのか判断つかないよ、あたしには。
はぁ。

「あの、陛下？」

「にゃに？」

ずびびびいと鼻をすすって顔を上げる魔王陛下。

ヤバッ、何ですか！　その返事は！

あたしに鼻血出させたいんですか！

心の中の葛藤を見事に押し殺すことに成功したあたしは、表面上は
平静な態度で尋ねた。

「陛下、あたしは陛下のお名前を知っているはずなんですか？」

「うん」

「どうしてですか？」

「僕の姉上だから」

堂々巡りだな、オイ。

第4話

まあ、とりあえず泣き止んだみたいだし、気をそらす作戦成功。そして助け舟は、意外な方向から現れた。

ジューターの兄さんだ。

これ以上無駄な堂々巡りさせて、執務に影響出るのを嫌ったに三千点。

「陛下、この娘はキュレオリア様の生まれ変わりでしょうが、キュレオリア様ご本人ではありません。陛下の御名を存じないのも、無理はなかるうかと」

生まれ変わりって、輪廻転生だよねえ。

だから魂がどうのこうのって言ってたのか。

全部信じるワケじゃないけど、これが夢じゃないのは確かだ。だって痛かったし。

魔王陛下はちよつと考える様子を見せて、コクリと頷く。

「うん、そうだね。僕ちよつと興奮し過ぎちゃったみたい」

陛下はあたしの手をぎゅつと握って言った。

「姉上、僕の名前はビュレフォース。ビューって呼んでね」

「あ、どうも。尾上 千歳です」

つられて名乗る。

「こっちがジュートル＝フェイ。僕の補佐をしている宰相なの。ジューター、ご挨拶は？」

魔王陛下に言われて、不機嫌そうな顔はそのままに、ジューターの兄さんが一礼する。

流れるような綺麗なお辞儀を、あたしは生まれて初めてみたかも知んない。

現代日本では滅多にお目にかかれないうな。

「王姉殿下におかれましてはご機嫌麗しく、ご尊顔拝し奉り、恐悦至極にございます」

雄牛？ ああ、王の姉で王姉ね。

あの、ぜんっぜんご機嫌麗しくなんてないんですけど。
むしろそんな馬鹿丁寧な挨拶をされたことなんてないから、ムズか
ゆくてしょうがない。

「あ、ご丁寧にどうも」

なんてマヌケな返事しか出来なかったし。

っていうか、普通ここでどうやって返すかなんて、知るわけないじ
ゃん。

あれか？ 苦しゅうないとか言っちゃうのか？

「あの、で、陛下」

「ビューだってば」

「……ビュー様」

「ビューって呼んでよ！」

「陛下、帰らしてください」

「ヤダ」

ヤダってナニ！？ ヤダって！

「とにかく帰りたいんです。絶対落とせないレポートの締め切りが
あたしを待ってるんです」

「そんなこと知らないもの」

このガキ！

という言葉は、かろうじて飲み込んだ。

なんせ御歳百六十歳の魔王陛下に、ギリギリ十代のあたしが投げか
ける言葉じゃない。

それに陛下の後ろに控えてる兄さんがギロリと睨んできてるし。

でもさ、いきなり連れてこられて帰せないって何様？

って、魔王サマだった……。

こんな天使みたいなナリしてても、魔王サマに違いないってか？

ふざけんじゃねえよ。

「とにかく、あたしの前世が陛下の姉であろうが雄牛であろうが、
関係ありません。今のあたしは尾上 千歳っていう人間です。元の

世界に戻してください」

見かけに騙されちゃいけない人っているよね。

まあ、ヒトじゃなくて魔族だけだ。

「ダメ、帰らせない。帰っちゃダメだよ」

陛下がぎゅつとあたしの手首を掴んでくる。

そのあまりの力の強さに、思わず顔をしかめる。

「いたたたたた！ あー！ マジで痛いんですけど！」

見かけは五、六歳だけど、結構力があるらしい。

あたしが叫ぶと、陛下はぱつと手を離れた。

あゝあ、手首に真っ赤な手の跡がついてら。まさか骨に異常はないだろうな。

そう思ってくいぐいと曲げてみるけど、たいした痛みはない。どうやら異常ないみたいだ。

「姉上、ごめんなさい。大丈夫？」

しょんぼりした顔で素直に謝られちゃ、強く怒れないのは、まあ、しかたないよね。

反省してるようだしさ。

「じゃあ、帰してくれます？」

「それはダメ」

前言撤回。素直だからって、すべてが許せるもんじゃないな、うん。
「陛下」

ジューの兄さんの不機嫌な声が響く。

別に大声出してるわけじゃないんだけど、声が響く人っている。

そしてどうやら、この不機嫌な声がデフォルトらしい。

幾分か機嫌のせいだろうけど。

たったその一言で、魔王陛下は全てを察したらしい。

ちなみにこれはあたしにも分かった。

つまり『仕事しろよ、コルア。決裁待ちの書類が山ほどあるつつてんだろ』てことでしょ？

多分、言葉遣いはもっと丁寧なんだろうけど。

陛下は渋谷ベッドから降りて、言った。

「とにかく、姉上は僕の姉上に間違いないからね。勝手に帰っちゃダメだよ?」

ちよつと待て、勝手はどっちだよ。

っていうか、帰り方なんか分かんないし。

「でも異なる世界をつなぐ技は、僕しか出来ないけどね」
だったら言っなよ!

帰らしてください、マジでお願いします!

「じゃ、また来るね」

「ちよつ、陛下!」

あたしの、待つてください、っていう言葉も聞かずに、陛下はとてとてと走って出て行った。

恐ろしく自己中だな、オイ。

我侭放題のガキなんて大嫌いだ。

その我侭陛下の後をジューターの兄さんが追う。

こっちは流石に走ったりしない。長いコンパスですたすと歩いて行く。

そしてドアの所で、こっちに振り向いて言った。

「ここであなは望む望まずに関わらず、王姉殿下として扱われる。その自覚を持ち、決して陛下の邪魔をしないように、胆に銘じておくんだな」

「ちよつ、それどういう意味ですか!」

あたしの問いかけを無視し、言いたいことだけ言って、不機嫌兄さんはさっさと部屋を出て行きやがりました。

第5話

何さ、無視することないじゃん！

あたしは頭にきて、追いかけて行って文句をつけてやろうと思ってベッドを降りた。

無駄に広い部屋を横断して、ドアノブに手をかけたけど、動かない。くそっ！ 鍵かけやがったな！

ん？ でもドアノブって、普通鍵をかけても少しくらいは動くよね？ びくともしないし、鍵穴も見当たないってことは、もしかして魔法とか？

「ふっざけんな！ あたしがどんな苦労してあの大学入ったと思っ
てんだよ！ 灰色の受験生活を終えてやっと薔薇色のキャンパスラ
イフと思いきや、毎日の講義は大変だし！ レポートはたくさんあ
るし！ 試験だって大変なんだぞ！ やつとの思いで一年過ごして、
二年目突入してんだよ！ こんなことで退学になってたまるか！
今までの苦労を無駄にさせんじゃねえよ！」

只今、当人比1.5倍で口が悪くなっております。ご了承ください。
厚そうな立派な木製のドアをどんどんと叩いたけど、誰も来やしな
い。

おまけで蹴り飛ばしたけど、裸足だったこと、忘れてたヨ！
めっちゃ痛え！

つま先を抱えてのた打ち回ってる様は、きっと傍から見たら馬鹿み
たいなんだろうな。

けどさ、実際に当事者になってごらんなさいよ。
落ち着いた行動なんざ、出来やしないつて。

大体さあ、こういうのって、一人くらいは協力者がいるもんじゃな
いの？

いきなり異世界に連れ去られちゃったのを理解してくれる人がさ。
あたしは出来ればカッコイイ兄さんがいいな。

ジューターの兄さんみたいな不機嫌な面したんじゃない、もっと爽やか系でさ。

はあ、何だか虚しくなっちゃったな。

とりあえず、現状把握、行ってみますか。

そういえば肩丸出しだし。

なんか羽織るもんじゃないかな？

あと、靴ね。

あたしは壁際に並んでる豪華で品があって絶対年代モンって一目で分かるタンスを端から開けてく。

中にはドレスがびっしり詰まってた。

綺麗なドレスを見れば、ちょっと体に当ててみたくなるのが乙女ゴコロってヤツでしょう。

タンスの扉の内側についてる大きな鏡に、姿を映してみた。

「……似合わね」

なんていうかさ、まずサイズから違うんだよ。

癢なことに、胸はあまって腹はキツイ感じ。

別にあたしがそんなにペチャパイってワケじゃないよ？ 言っとくけど。

このドレスの主が良すぎるんだって、体型。絶対DかE以上あるよ。グラビアモデル並み、まではいかないか。

これまでならコルセットでも閉めんのか、って一応納得はできるけど、色もさ、微妙に合わないんだな、これが。

あたしはファッショセンス、そんなに良くないから、詳しくは分かんないけど、自分に似合うか似合わないかくらいは分かるつもり。あたしがここの衣装じゃなくて、黒のワンピース着せられてるワケが分かったわ。

シンプルなデザインはあたし好みなんだけどなあ。

でもこれを見たら、どんな馬鹿にだって分かるでしょ。

これはあたしのじゃ、尾上 千歳のじゃない。

オレ……じゃなかった、え〜と、キュレ……そう、キュレオリアのだ。

きつとこのドレスだけじゃなくて、この部屋自体がキュレオリアの部屋だったんだと思う。

なんだか、拒絶された気分だ。

ここはあたしがいるべき場所じゃないって、この部屋全体が言うてるみたい。

あたしだって好き好んでいるわけじゃないのに……。

はあ。

ため息を一つついて、手に持ってたドレスを元に戻した。

他のヤツ、試す気にもなんないよ。

あたしはガサゴソとタンスの中身を漁って、シヨールと靴を発掘した。

靴は何とかサイズが合った。

シンデレラみたいにぴったりってことはないけど、キツくないし、脱げもしない。

まあ、これなら大丈夫でしょ。

ヒールも高くないから、多少は走れそう。

幅広のシヨールを羽織って、準備はOK。

大きな窓の側に行く。

外はテラスになっているみたいだ。

こっちも鍵だか魔法だかがかけられてるかも知れないなあと思いつつ近づくと、どうやら普通の鍵だけしかかかってないみたいだ。

うん、ラッキー。

さっそく鍵を外して、テラスに出た。

「うへっ!？」

テラスの手すりにしがみついて下を見れば、手入れの行き届いた綺麗な庭。

どうやらここは二階みたいだ。

けど天井が高いらしいので、実質的には大体三階くらいの高さにあ

る。

でもあたしが驚いたのは、その先だ。
心のどつかじゃ、これがドッキリって可能性も捨てきれてなかったんだよね。

だってさ、いきなり異世界だの、魔王陛下だの、魔法だのって信じられるわけないじゃん。

百六十歳のお子様だって、担がれてるって思うのが普通でしょ？

あいにくと、あたしこれでも現実主義者なもんでね。

メルヘンの世界はとくに卒業してるしさ。

でもこれ見たら、信じないわけにはいかない。

ずるずると体の力が抜けてく。

多分これが世に言う、腰が抜けたって状態だ。

ぺたんとテラスに座りこんだあたし。

今日は初めてづくしだわー（棒読み）。

尾上 千歳、ギリギリ未成年の主張。

色んな憤りをこめて、叫びます。

「うつそつでしょー！」

遙か下の方に見える地面。

これはあれだ、まあ、なんていうか、魔王の動く城？

いや、むしろラピュか。

第6話

流石に上空は肌寒くて、あたしはショールをかき寄せた。
で、座り込んだまま、もう一度現状整理。

その一、ここはあたしの生まれた世界じゃございません。

その二、べらぼうに可愛い外見五歳児の自己中魔王陛下は御歳百六十歳。

その三、あたしはその魔王陛下の姉の生まれ変わりだそうです。

その四、宰相閣下は不機嫌な面した美形の兄ちゃん。

その五、あたしが今いるのは天空の城。

以上。

くそつ、ほとんど無きに等しくないですか！

全ツ然質問できなかつたもんなあ。

どうしようか。

こんな時なのに浮かんできたのはレポートのことだった。

空を仰げは真っ青な空が広がってた。

完璧に夜が明けてる。むしろ太陽の位置からすると、お昼過ぎくらい。

ちなみに締め切りは午後三時。

でも、今からじゃ無理。完璧落とした。

うう、あんなに頑張ったのに！ あと三百字ちょっとだったのに！

徹夜までしたのに！

「なんでだコンチクショー！」

はあはあ。

思いつきり叫んだら、少しはすつきりした。

でもやっぱり悔しい。

けなげに頑張ってるあたしに、神様はなんて無情なんでしょうね。

あれか？ 正月くらいしか詣でないからか？

ちっ、器量狭いな！

「ねえ、君。さっき叫んでたよね？」

ぶつぶつと呪詛の言葉を吐いてると、いきなり声をかけられた。ここは二階、よって下を見る。

おお！ 理想を絵に描いたような爽やか系兄さんがいるじゃありませんか！

前言撤回！ 神様ありがとう！

でもアレ聞かれたのは恥ずかしいぞ！ チクショウ！

「そ、そうですけど……何か？」

「いや、ちよつと気になったものだからね」

庭とテラスで会話。

ロミオとジュリエットみたいだなあ。

ああロミオ様、ロミオ様、どうしてあなたはロミオなの？
つて、まだ名前も聞いてないけどね。

「聞き苦しいことをお聞かせしまして……」

「気にすることはないよ。多分俺以外は聞こえてないだろうし」

「はあ、そうですか」

いや、あなたに聞かれたこと自体、相当恥ずかしいんですけど。

その間を警戒してると思ったのか、爽やか系兄さんが自己紹介してきた。

「ああ、そうだ。まだ名乗ってもいなかったね。俺は表の十將軍が一人、ミハイル・ピロツツ」

「あ、どうも始めまして。尾上 千歳と言います」

「オノエ？ 変わった名前だね」

「いえ、尾上は苗字で、千歳が名前です」

「じゃあ、チトセって呼んでもいいかな？」

「えっ、あ、どうぞどうぞ」

ヤバッ、ここ最近、男の人に下の名前で呼ばれたことなんてなかったから、無駄に緊張しちゃよ。

しかもカツコイイ爽やか系の兄さんにだよ？

まあ、多少声が裏返ったのは、ご愛嬌と言っヤツで。

「チトセ、そこここで話すのもなんだから、降りて来ない？」

ピロツツ將軍の言うことは、至極もつともなことに聞こえるけど、正直あたしは迷った。

確かに三階相当の二階のテラスと庭とでの会話は、声を張り上げなきゃいけないし、めんどい。

けどさあ、あたしにも危機管理能力くらいあるんですよ、一応。

ここで顔がイイってだけでホイホイついてくような尻軽じゃないつもりなんで。

それに將軍って名乗ってるけど、それが本当かどうか、判断できないし。

人を純粹に信じられる年頃でもないんだよね、もう。大分スレちゃってるからさ。

「俺のことが信用できない？」

ええ、その通りです。

なんて、正直に言えるか！

ここはあれだ。一応困ったような顔をして、否定しとくべきだろう。うん、早速実行。

「いえ、そんなことは……」

「大丈夫だよ。將軍の名誉にかけて女性を手荒に扱ったりはしないから」

う、その爽やかな笑顔が眩しい！

ここで拒んだら、なんだか悪い気がしてきちゃうね。

こりゃ、女性の扱いに慣れてるって、絶対。

しかも年上年下同年、全てにモテるに違いない。

うゝむ、このチャンスを逃すと、情報を得ることが難しくなるかも知んないなあ。

さて、どうするか。

あつ、その前にこの部屋、ドアに鍵だか何だかがかかってるから開かないんだっけ？

降りてくの、普通に無理じゃん！

困ったなあ。

まさか脱出劇さながら、カーテン千切って結んで縄にするわけにもいくまい。

っていうか、こんなに高価そうなカーテンを引き千切るなんて恐ろしいこと、貧乏性小市民のあたしには無理。考えるだけで恐ろしいわ。

だからあたしはその旨を將軍に告げた。

閉じ込められた、貧乏性うんぬんは抜かしてね。

「あの、ピロツツ將軍。お申し出は嬉しいんですけど、降りられないんです」

「大丈夫だよ。飛び降りればいい」

あのぉ？ すみません、將軍。

あたし、普通の人間なんで、三階の高さから飛び降りたら普通に死ぬんですけど？

飛び降りにはぐちゃぐちゃするんで、勘弁してください。

「無理です」

「大丈夫だって。ちゃんと受け止めてあげるから」

いや、無理でしょ。

落下速度とか重力とかの関係上、三階から飛び降りた人間を受け止めることなんて出来ないハズ。

マットやネットでもあれば話は別だろうけどさ、生憎そんなものは見当たらないしねえ。

こここの重力が地球に比べて軽いとは思えない。

よって飛び降りたら、將軍もろともつぶれるのが関の山ってトコでしょ。

すみません、あたし、死ぬときは畳の上で大往生って決めてんですよ。

転落死なんてもっての他。だってぐちゃぐちゃなんてヤだし。

なのに將軍は両手を広げて、さぁおいでのポーズでスタンバイ中。

あの自信はどっから来んの？

三階の高さから飛び降りるのは、かなりの勇気が必要だと思っただよね。

でも、なんだかこの人なら大丈夫な気がしてきちゃったよ。

このままじっとしてても、事態が進むとは思えないしね。

おっしや！　ここで怯んだら女が廃るわ！

いっちょやったるうじゃないの！

あたしはがしっとテラスの手すりに手をかけて、自分の体を手すりの上に持ち上げた。

「てやっ！」

そしてそのまま空中へと華麗に（　ここ重要）ダイブしたのでした。

第7話

まあ、自分でも何が起こったんだか、よく分かんないんだけど、とにかくあたしは無事、地面に着地することが出来た。

やっぱり怖くて落下中、目つぶっちゃったんだけど、何の衝撃もなくて目を開けたら、ピロツツ將軍の爽やかな笑顔が、どアップでありました。

いやあ、近くでも見てもガツカリしない男の人って、なかなかいいもんだと思うんだよね。

何か魔族って美形率高いっぽい。

って、まだ魔王陛下と宰相閣下と將軍殿の三人しか知らんけどさ。たまたま美形にばっか遭遇してるんだとしたら、あたし大分運使ってんな。

ああ、こっち連れてこられたこと自体が運悪いんだから、プライマイゼロか。

ひょいと將軍に下ろしてもらって、お礼を言う。

「有難うございます、ピロツツ將軍」

「どういたしまして、チトセ。でも將軍は他人行儀だし、ミハイルでいいよ」

「えーと、善処します」

なんか政治家のヘタな言い訳みたいだけど、年上の人を呼び捨て出来るほど、あたしアメリカナイズされてないもんで、心の中では將軍って呼び続けます。すみません。

こうして同じ地面で向き合うと、將軍は結構背が高かった。

百八十近くあるんじゃないかな。

ああ、でもジューターの兄さんのが高そうだな。

あの兄さんバ力がかかったし。多分百九十はあるよ、ありゃ。威圧感ありまくってたからね。

うんうん。それに比べて將軍は丁度いいサイズだわ。

やっぱり高けりやいってモンでもないっしょ、背丈って。

將軍が落ち着いて話せる四阿あずまやがあるというので、案内してもらったことにした。

その道すがら、將軍はズバリと尋ねてきた。

「異世界から連れてこられたって、本当？」

「あの、何でご存知なんですか？」

「城はもうこの噂で持ちきりだからね」

あたしが連れてこられたのは、多分昨日か今日あたりだと思うんだけど、情報が早いな、オイ。まあ、噂ってそんなモンだけだよ。

「そうなんですか」

「うん。だから一足先に一目見たくて、あそこまで行ったんだ」
偶然じゃなかったのか。

そうだよねえ、そうそう都合のいいことあるワケないし。

「でもびつくりしたよ。叫び声が聞こえた時はね」

「すいません。それは忘れてください……」

將軍、お願いですから、思い出し笑いとかししないでくださいよ！

よりもよってこんなカツコイイ人に聞かれるとは、余計に恥ずかしいっいたらないな、くそ！

その後、將軍から得た情報によると、この国の住人はやっぱり大抵が魔族で、將軍自身もそうらしい。

魔族っていうのは、その身に宿した魔力が大きければ大きいほど、歳をとるのが遅くなるんだそうなの。

あの外見五歳児の百六十歳の陛下は、そういった理屈で成り立つらしい。

あ、でも精神年齢は外見に比例するんだって。

能力なんかはまた別らしいけど。

「じゃあ、やっぱり陛下は歳をとるのは遅い方なんですか？」

「あの方はかなり特別だよ。何せ俺は今、百八十四歳でこの外見だからね」

あたしの目には、將軍は二十代半ばくらいにしか見えないんですね。
どね。

なんかもう、自分がスゴイひよっこに思えてくるわ。
あっちの世界でもひよっこに違いはないけどさ。

「あの、普通の二十歳前後の人って、どのくらいの外見なんですか？」

「うーん、二十歳くらいだと、多分、陛下くらいか、ちょっとくらくらいじゃないかな？」

つまりあたしって、スゴく老けて見えてるってことですか、そうですか。

こっちの人、っていうか魔族には、あたしって何歳くらいに見えてんだろ。

……聞くの怖いから、やっぱり止めとこ、うん。

將軍に案内された四阿は、周りから浮いてるわけではなく、埋もれてもない、絶好の趣がある所だった。

キッチンと手入れもしてあるし、いいトコだね。

「気に入った？」

「はい」

「それは良かった」

につこりと笑う將軍の笑顔が眩しく見えるわ。

爽やかで癒されるもん。

ついついあたしも笑い返しちゃうし。

「あゝねゝうゝえゝ！」

くはっ。

うう、いきなり腰にタックルがまされて無事に済むのは、レスリング選手ぐらいだってコトを分かってください、陛下。

っていうか、気配なかったんですけど！

「あれほど勝手な行いを慎むよう、申し上げたはずですが？」

ジューターの兄さんの低い声が、遙か頭上から降ってきた。

あはは、座つてると更に威圧感を感じますねえ、オマケに逆光っス

か？

ヤバッ、怖！

魔王陛下の手が回された腰もかなり痛いんですけど、恐怖って点じや兄さんのが上。

でもねえ、それで素直にゴメンナサイできるほど、あたし、可愛い女じゃないし、人間も出来てないんだよね。

だからにっこり極上の笑顔を浮かべて言ってる。

「あら、申し訳ございません。何せ右も左も分からない世界にいきなりつれてこられて、何も知らされずに閉じ込められたものですから、自分が置かれている状況の把握に努めようと思うことは、至極当然のコトだと思いますし、あたしはそれを実行に移したまでですけど、もし仮に事前に説明してくださっていたら、納得するしないは別にしましても、このような無茶はしなかったことと思いますわ、閣下」

つまりは『てめえらが説明しないのが悪いんじゃないが、ボケ』ってコト。

さつきはいきなりワケ分からんことばかり言われてたから、一方的に言われっぱなしだったけど、普段のあたしがそれに甘んじると思ったら大間違いだ。

第8話

いくらオブラートに包んだって、言葉の端々のトゲに気づかないのは、よっぽどのにぶちんだけでしょ。

案の定、ジューターの兄さんの周りの空気が一、二度下がった。眉間のしわも更に深まる。

気圧されそうになるけど、ここで退いたら負けだ。

そしたらあたしはもう、言いなりになるしなくなっちゃうだろう。そんなのは絶対にゴメンだ。

あたしは浮かべていた笑みを消して、勝負をかけた。

「あたしは黙って言うこと聞くような、お人形さんじゃありませんから」

これはジューターの兄さんだけに向けて言ったんじゃない。

人の腰にへばりついたまんまの陛下にも向けて言ったつもり。

あたしは魔族じゃないし、ましてや魔王の姉でも、キュレオリアって人なんかじゃない。

人の都合も考えないヤツに言うこと聞けって言われて、はい、そうですか。

なあんで、言えるワケねえっつーの。ふざけんな。

「姉上？」

あたしの声の硬さに気づいたのか、陛下が顔を上げる。

不安気な顔だけど、あたしはもう、それにほだされたりしない。きっぱりと言い切る。

「あたしはキュレオリアなんかじゃありません」

「違うよ！ 姉上は姉上だよ！ 僕には分かるもの。魂で分かるの！」

ぎゅっとしがみついてくる陛下をひっぺがす。

陛下が求めているのは、キュレオリア姉上でしかないってことは、はなっから分かってた。

でもさ、ここまで“あたし”を否定されたら、腹立たしいっただらない。

まるであたしの存在意義がないみたいじゃん。

「姉上……」

伸ばされた手をぴしゃりとはねのける。

もう我慢の限界だ。

元々あたしはそんなに気の長い方じゃない。

「だからあたしは尾上千歳だって言ってるでしょ。前世だとか魂だとか、そんなの知ったこっちゃない。もうアンタの姉上でもなんでもないんだ、さっさと元の世界に返して」

敬語なんてもう使わない。敬語を使ってやる価値もない。

巨大な力を持ったのがこんなお子様だから、余計に始末が悪いんだ。この国の人に同情するね。

どんなに実務能力が高かろうが魔力が強かろうが可愛らしかろうが、中身がこれじゃ、一国の君主として失格だ。

自分のことしか考えられないようなクズ、あたしだったらさっさと見限ってる。

「早く返せ、自己中」

もう爽やか將軍の前だとか、不機嫌兄さんの前だとか、どうでもいいよ。

あたしは帰るんだから。

陛下もこれで優しい姉上はどこにもいないって思い知ったでしょ。

「……もん」

「はあ？」

陛下が小さな声で呟いた。

あまりにも小さくて、全ッ然聞き取れなかったけどな。

「姉上はいるもん」

「いるかよ」

ここにいるのは尾上千歳だって、何回言ったら理解するんだ？ このお子様は。

「いるったら、いるんだもん！」

「いねえつつたら、いねえんだよ」

「姉上はいるっ！」

ぐふっ！

陛下が叫んだと同時に、腹の奥だか胸の下だか辺りから激痛が走った。

それが段々全身に広がっていつて、痛みに耐え切れずに倒れる。

「チトセ！」

將軍の声が聞こえた気がするけど、よく分かんない。

あまりの痛さと熱さに、体を丸めて胎児のような格好になる。

くそっ、何だこりゃ！

ハラワタを鍋につっこまれて、ぐるぐるとかき混ぜられてる気分だ。つまりは最低。

こんな痛み、今まで味わったこともない。

頭のとっぺんから足の爪先まで、体中がビリビリする。

涙や油汗は流れるし、息もまともに吸えない。

「うっう」

とにかく苦しい。痛いとか叫ぶことも出来ず、ただうめく。

あたしには何時間にも感じられたこの拷問のような時間も、実際には数十秒くらいだったらしい。

始まった時とは逆の順序で、体が徐々に楽になった。

第9話

息が吸えるって、こんなに素晴らしいことだったんだ。

大きく深呼吸して、そう思った。

「キュレ……オリア……様……？」

だからあたしは違うんだって、と言おうとして、あたしは凍りついた。

体を起こした拍子に“長い黒髪”が頬にかかったからだ。

あたしの髪は、軽く明るくした茶髪だ。

それに長さだって肩にかかるくらいだった。

なのに今は大分長い。多分立ったら膝裏くらいまでなるんじゃないかな。

信じられない思いで、自分の手を見る。

違う！ これはあたしの手じゃない！

あたしはこんなに色白じゃないし、こんなすつとした指じゃない！

「なっ」

思わずこぼれた声に凍りつく。

今の声があたしの声？

声まで違う……。

この体は“あたし”じゃない。尾上千歳って人間じゃない……。

「なんじゃこりゃー！！」

ばしゅん！

叫んだ途端に、衝撃波出しちゃいましたよ！

二度びっくりだ！

髪の毛はざわざわするし、樹も風もないのにうごめいてる。

なんつーか、こう、ほとばしる熱いパトス？

いや、それは違うか。

思い出は裏切るかもしれないけど。

「な、な、な、な」

髪の毛押さえてるのに、何でうねうね動くの！

怖！ メデューサもびっくりだ！

「落ち着け！」

ジューターの兄さんがあたしを抑えようとする、が、だが、しかし、然れども！

「こんな状態で落ち着いてられっかぁ！」
ばしゅん！

うおっ、落ちてきた葉っぱが吹っ飛んだよ！

まるで一流の剣士が出した闘気で破裂したかのようだな！

某赤毛で背の低い頬に十字傷のあるお侍さんが活躍する漫画でこんなシーン見たよ！

「ちっ、魔力の制御が利いていないな」

「はぁ？ 魔力？」

「そうだ。ピロツツ將軍、結界を。これ以上被害を広げぬために」

「あ、ああ」

爽やか將軍が何事か呟くと、多面球の結界みたいなのが広がった。

マア、コレが魔法？ ハジメテ見ルヨ！

って、片言になってる場合とかじゃないし！

「ナニがドウなってるんだよ！」

片言抜けてねえし！

「……姉上？ あれえ？ おかしいなあ。姉上の魂を呼び起こしたはずなのに……」

陛下が首を傾げる。

また貴様のしわざか！

「はーやーくーもーとーにーもーどーせー」

地獄の亡者もビックリな低音でうなりながら、陛下の肩を揺さぶる。外見ちびっこだからって容赦はしねえぞ！ このタコが！

「や、だ」

ガクガク頭を揺らしながら、強情にも陛下はそんなことを言う。

「ぬぁんだとお！」

「落ち着いて姉上！ 深呼吸だよ！ ひっひっふー」

「それはラマーズ法だ！」

陛下が口を開く度に怒りのボルテージが上がってく気がするな、うん。

それにつられて、あたしの髪も更にうねうねする。

ジューターの兄さんが少し考える人になって、ぽつりと呟いたのが聞こえた。

「やむをえんな」

ぐはっ！

いきなりボディーブローをくらったあたしは、再び夢の世界へサヨウナラ、元の世界でレポートの成績が最低のFをもらうという、悪夢を見たのでした。

第10話

慣れってホントに怖いモンだよなあ。

まず朝、鏡を見ても驚かなくなった。

鏡に映るのは王姉キュレオリア。でも中身は尾上千歳のまんまなんだよね。

あれから一月が経って、状況は依然進展なし。

毎日元の姿に戻せ、元の世界に帰せって魔王陛下に言うけど、あの自己中は聞きやあしない。

それで、まあ、事情はアレだけど、タダ飯食うわけにもいかんでしょってことで、地方の陳情を聞いたりなんなりっていう王姉殿下としての仕事を、引き受けちゃってるワケですよ。

「王姉殿下におかれましてはご機嫌麗しゅう、こうして謁見願えまして恐悦至極にございますれば、我が国の益々の繁栄は大変喜ばしく、また魔王陛下におかれまして……」

でもさあ、何でこう、おっさんて話長いんかな。

まだ挨拶だけで本題入ってないし。

背筋は伸ばしてなきゃなんないし、笑顔は崩せないし、ヘタなこと言えないし、ストレスたまるわ……。早く終わってくれ、頼むから。これがナイスミドルだったら耐えられるかもだけど、現実には丸々と太ったおっさんだ。しかもハゲ。

救いといえば、あたしのすぐ斜め後ろに爽やか將軍、もといミハイルⅡピロツツ將軍がいることかな。

いくら外見がキュレオリアだとしても、中身は現代日本の大学二年生尾上千歳だから、小難しい政治の話をされたって、全部分かるわけがない。

そんなワケで將軍があたしの後見人になってくれたんだよね、これが。

うんうん、怪我の功名って、こういうことを言うんでしょね。

こんなカツコイイ男の人が補佐してくれるんだから、頑張らないわけにはいかないでしょ。

でもさあ、ちょっと危機感を感じてたりもするわけで……。

だってこのままなし崩しのうちに正式に王姉殿下とかなっちゃったりしたら、ホントどうしようだよ。

あたしは手元の資料をパラパラめくって、遠回しかつ大げさに話しておっさんの話を整理する。

壊れた堤の修復か、この間の大雨で決壊したわけね。

ジューターの兄さんの話によれば、また大雨が降る可能性があるらしいから、早めに対応すべきだな。

ちなみにあたしがこうして字を読めたり、話が出るのは、こっちに呼ばれた時に使われた魔方陣に、あらかじめそという式を書き込んであったからなんだそう。

けっ、用意周到過ぎて、涙が出らあ。

「……以上でございます、王姉殿下」

やあっと終わったんかい。マジで長かったな。もっと簡潔かつ的確に話せての。

ただどあたしはそんなことをおくびも出さずに、にっこりと笑って言う。

「あなたの話はよく分かりました。このことは陛下にも申し上げ、迅速に対処することを約束しましょう」

この一月で身についたもの、それはきつと厚い面の皮と演技力だ。

はあ。

おっさんが退出して、あたしは肩の力を抜いた。

あー、疲れた。

ぐるぐると肩を回して、後ろに立ってる將軍を見上げる。

「あんな感じでどうですか？」

「上出来だよ、チトセ。お疲れさま」

あー、將軍の爽やかな笑顔と温かい労いの言葉に癒されるわあ。

將軍はあたしを千歳として扱ってくれる、唯一の人物だからね。他の人はあたしのことを完璧にキュレオリアとして扱ってくる。

身の回りの世話をしてくれる侍女のお姉さんたちも、恐れ多いとか何とか言つて、軽い話とか出来ないから、將軍と話してる時が一番気が楽なんだよなあ。

將軍は心のオアシスだよ、ホント。

「でも、ホントにいいんですか？あたしの補佐とかしてて。他にもお仕事があるんじゃないですか？」

だって將軍は仮にも“表の十將軍”の一人でしょ？

つて、ここでちよつと、この国の政治体制について簡単におさらいしてみよう。

コラ、いきなりだとか、何だと言わない、そこ。

まずはこの国が専制君主制をしいてるのは、陛下が政治を行っていることから明らかだ。

それをサポートするのが、内政・外交を司る裏の十賢者と軍事・警察を司る表の十將軍。

ちなみにジューターの兄さんは、裏の十賢者の一人なんだそうなの。

あ、裏つていつても、怪しいとかそういう意味じゃないよ？

外に出て華々しく活躍する表の將軍たちに対して、裏から国を支える人たちって意味なんだつてさ。

まあ、あと部署やらなんやらが沢山あるらしいけど、あたし自身把握しきれないんで、割愛させていただきますが、あしからず。

「領地は兄が治めているし、治安警備の方もちゃんと部下に命じてあるから。俺の部下は優秀だからね。最近は平和で戦も起こらないし、余裕があるから大丈夫だよ。それともチトセは俺が忙しくて側にいない方がいい？」

「そ、そんなとんでもない！ 將軍にはお世話になってますし、これ以上負担をかけたくないなつて」

「チトセはそんなこと気にしなくていいんだよ。大変なのはチトセの方なんだから」

ああ、ホントにいい人だ、將軍。
カッコよくて爽やかなだけじゃなく、優しいだなんて、
もうこの国の宝だね、うん。

第11話

「姉上っ！」

来たな！ 諸悪の根源！

とっとこ走ってきた陛下が、あたしの足にまとわりつく。

「陛下、どうしてここにいますか？ っていうか、仕事はどうしたんですか？」

また敬語に戻ってるのは、別に尊敬の念が湧いたとかそういう意味じゃない。

最近分かってきたことなんだけど、陛下はあたしに口汚くののしられるよりも、敬語を使われた方が嫌がるんだよね。つまりは嫌がらせの為です、はい。

「それとも、やっと帰らせてくれるつもりになったんですか？」

「ううん。違うよ」

即行で否定してくれるよな、ふふ。これはもう、挨拶代わりだ。

「今日の分はもう終わらせてきたの。急な案件が出なければ、大丈夫だよ。だから、姉上をお茶に誘いに來たの」

こんなナリをしてらっしゃいますが、この外見五歳児中身百六十歳の魔王陛下は、統治面では結構優秀な君主なんだそうザマス。

この可愛らしいお口から、経済だの軍事だのの話題が飛び出すと、何だか変な気分になるよ。

陛下の頬をつまんで横に伸ばす。

うにょーんとよく伸びるな。餅みたいだ。

っていうか、百六十歳でこの肌のピチピチさ、世の奥様方に恨まれそうだな。

「おひゃひまへんか」

「しません」

何が悲しゅうて諸悪の根源と仲良く茶あ飲まなきゃなんないのさ。絶対お断りだ。

「ダメなの？」

潤んだ瞳で上目遣いとかすんなよ。

絶対自分の利点知っててやってるよ、コイツ。

って、コラ、スカートの裾を掴むな！

シワになんたる！

ハイ、そこ。『陛下、お可哀想……』とか言って、目元をハンカチで押さえない！

ホントに可哀想なのは、あたしの方だから！

あたしの心の叫びも虚しく、周りは完全に陛下の味方だ。

く、ここはヤツの本拠。アウエーのあたしには分が悪い。

ちらりと後ろを振り返れば、将軍が苦笑いを浮かべていた。

目で『助けて！』と訴えたのに、『頑張っ』と返される。ちえっ。

それにしても、いつも陛下にぴたりくっついてる宰相閣下はどうしたのさ。

ジューの兄さんがこのお子様の保護者じゃないの？

しっかり躡けてもらいたいもんだわ。

まあ、最近はおあたしの魔力コントロール修行も見えてくれるから、忙しいのは分かるけどね。

陛下は泣き落としが無理だと悟ったのか、作戦を変更してきた。

「姉上、美味しいお茶菓子もあるよ。この間姉上が美味しいって言ったナニヨン、また作ってもらったから。一緒に食べよう？」

う、あのガレットに似た焼き菓子……。

あれは確かに美味しかった。

バターの風味が利いてて、甘過ぎない上品な味。

うん、流石宮廷料理人って思ったしね。

ヤバいな、ツボをついてくるよ。

うー、プライドを取るか、実を取るか。悩みどころだなあ。

更に追い討ちをかけるように、陛下は言う。

「あとね、他にも美味しいお茶菓子があるよ。焼きたてが一番なん

だから、早く行こう？」

あたしはもう一度、將軍を振り返った。

「……あと、どのくらいお仕事ありましたっけ？」

「お茶する時間くらい、大丈夫だよ」

はは、將軍は『お見通しだよ』というふうに、的確な答えを返してくれました。

仕方ないじゃん。甘いもの、大好きなんだよ。

「やった。ね、姉上。早く行こう」

「分かった。分かりましたから、袖を引っ張らないでください！
伸びる！」

ちよっと、あたしが惹かれたのは、美味しいお菓子たちなんだから
な！

そんな嬉しそうな顔すんなっつーの！

あたしは彼の姿をじっくり数十秒見つめて、見なかった振りをする
べきかどうか悩んだ。

「どうしたの、姉上？ お茶が冷めちゃうよ？」

「そーですねー」

陛下の言葉に、やる気がないアルタの観客のような返事しちゃうく
らいに衝撃だった。

うつわー、あのジューターの兄さんがエプロンつけて、セッティング
してるよ！

まだフリル付じゃないのが救いだけど。

陛下に引っ張られつつ連れてこられた英国式庭園のような中庭。
衝撃はかなり大きかった。

エスコートされるままに席について、意を決して尋ねてみた。

「あの、どうして宰相閣下がセットされてるんですか？」

「えー、だってお菓子作ったの、ジューターだもの」

「ええっ！」

うわっ、マジっすか！

あのジューターの兄さんが？

常に眉間に深いしわを刻んで、不機嫌オーラを撒き散らしてる宰相閣下が？

うわぁ……。

「っていうことは、もしかしてこの間のえくと、な、ナンニャ？」

「ナニヨンです」

「そうそう、そのナニヨンも閣下が作ったんですか？」

「そうです、それがどうか致しましたか？」

「……いえ、ちよつと意外だっただけです」

う、『何か文句あつか？』って目で睨まれたよ。

陛下がいない時はあたしに敬語なんて使わないくせに、陛下がいると言葉遣いは丁寧になるんだよね、ジューターの兄さん。

まあ、あくまでも言葉遣いは、だけど。

「ジューターはね、甘いものを作るのが得意なんだよ。とっても美味しいから僕も大好きなんだ」

につこり笑う陛下に、兄さんが『恐れ入ります』と頭を下げた。

はは、人間って、意外な特技を持ってるもんだよね。

第12話

「あ、そうだ。姉上にお渡しするものがあつたんだ。ちょっと待っててね」

美味しいお茶とお菓子を頂いた後に、いきなり陛下がそんなことを言った。

こつち返事も聞かないで、とたたたたと走っていく陛下の背中を見送って、あたしはジュトーの兄さんの方を向いた。

今なら、他の耳はない。聞きたいことを聞くチャンスだ。

「何で、陛下は……めげないんですか？」

あたしは何度も陛下を粗雑に扱ってきた。

今だって、まったくもって可愛がつてなんてない。

それでも陛下が、まだあたしを姉として慕ってくるのは何故？

あたしの前世がキュレオリアだったとしても、別人だってあたしの態度を見りゃ、明らかでしょ？

もしかして、陛下って……マゾ？

兄さんはあたしの問いに、少し考えるような間を置いてから、口を開いた。

「陛下は……お寂しいのだ」

「あなた達がいるのに、ですか？」

たくさんの方がいるでしょ？

陛下のことを可愛がつて、心配してくれて、サポートしてくれる人がさ。

兄さんは、はあ、と息をついて言う。

「だが家族は特別だろう。陛下に臣下はいても、友や家族はいない。陛下にとって、姉君は唯一の肉親だった。……魔王となる者の運命を知っているか？」

「いいえ」

「魔王となる者は、その身に膨大な魔力を宿して生まれてくる。そ

して母体がそれに耐えられることは、非常に稀だ」

「それは……つまり……」

母親の命と引き換えに生まれてくるってこと？

あたしの表情で悟ったのか、兄さんは小さく頷いた。

「陛下もその例に漏れなかった。父君もすでに病没しておられた。

陛下をお育てしたのは、キュレオリア様だ。陛下にとって、キュレ

オリア様は姉であり、母だった」

「キュレオリアは、陛下を、母親を死なせた弟を恨まなかったんでしょうか？」

「さあな。本心がどうだったかは、本人にしか分からぬだろう。だが、キュレオリア様は陛下を育て、選王までもちこんだ。それだけは、確かなことだ」

「そうですね……」

大体の事情は分かった。

陛下が何故、キュレオリアにそこまで執着するのか。

でもさ、不幸な生い立ちが全ての免罪符になるとは思わないよ。

あたしの何倍も生きてて、そんなことも分からないのかね。

あたしは皮肉な笑みを浮かべた。

「じゃあ、あたしはどうなんでしょうね。あたしは自分の家族と離れ離れになっても、構わないってコトですか？」

ギリギリ十代とはいえ、あたしはもう親がいなけりゃ何も出来ない子どもじゃない。

けど、だからといって、家族とこのまま永遠に会えなかったら？

そんなの、冗談じゃない。

ジューの兄さんは、それに答えることが出来なかった。

ただ代わりにポツリと呟いた言葉に、今度はあたしが答えられない番だった。

「今の陛下にとって、姉上はすでにあなたのことだ。それだけは、どうか覚えておいて欲しい」

その重たい沈黙を吹き飛ばしたのは、またもやあたしにタツクルをかますようにして抱きついてきた陛下だった。

「ぐえっ！」

「姉上、お待たせ！……どうしたの？何かあったの？」

陛下はあたしたちの間に漂う微妙な空気を敏感に察知したらしい。

「いえ、別に何も」

「本当に？もしかしてジューターにいじめられた？」

あー、まあ、それに近いもんはあったかなあ。

厳密に言えば、まったく違うもんだけどさ。

兄さんは陛下の保護者だから、心配でしょうがないんだろうな。

ちらりとジューターの兄さんの方を見ると、相変わらず不機嫌な表情かおしてるし。

多分、さつさと否定しろって思ってたんだろな。

さあて、どう答えようかね。

「ね、姉上、どうしたの？本当にジューターにいじめられたの？」

陛下は心配氣にあたしを揺さぶりながら、ジューターの兄さんを睨んだ。

ジューターの兄さんが心外そうに否定する。

「そのようなことは致しません」

「僕は姉上に聞いているの！ねえ、どうしちゃったの、姉上！」

陛下が慌てふためく様を見るのは楽しいけど、あんまりやるとジューターの兄さんが可哀想だし、まあ、この辺で八つ当たりは勘弁してやりますか。

「ホントに何にもないですよ。っていうか、姉上って呼ばないでください。あと、早く元の姿に戻して、元の世界に帰してくれるかなあ？」

「えっ！」

いいもって、言ってよ。つまんないな、もう！

まあ、異世界人に通じるとは思わないけどさ。通じた方が驚きだけどさ。

「はい」

と陛下から手渡されたのは、小さな包みだった。どうやら陛下はこれを取りに行つてたらしい。

温かいつてことは、中身は焼きたてのお菓子だったりするのかな。陛下を見れば、キラキラした顔で見上げてくる。

「これね、僕が頑張つて作ったの。姉上に食べてもらいたくて。いっぱいジューシーに手伝つてもらつたけど……」

包みを開くと、少し焦げた不恰好なクッキーのようなお菓子が入つてた。

その一つをかじってみる。

「おいしい？」

期待顔の陛下。

「不味い……」

「え」

陛下の顔が曇る。

「……ことはないですよ」

そう言つて、二つ目に手を伸ばした。

うん、ジューシーの兄さんのみたいに、ものすつごく美味しいってことはないけど、結構美味しいかな。

まあ、そんなこと、言つてやるつもりはないけどね。

三つ目、四つ目と全部食べ終えて、一言。

「ごちそう様でした」

あゝ、そんな嬉しそうな顔しても無駄だから！

ほだされたりなんか、絶対しないからな！

あたしはさっさと現代日本に帰つて、お昼休みにウキウキウォッチングするんだから、そこんトコ、忘れんなよ！

あたしはふいつとそっぽを向いて、お茶を一気に飲み干したのでした。

第13話

想うことさえ罪ならば、どうかこの身に罰を。

そうすれば、私が貴方を本気で想っていると、証明できるでしょう？
貴方の節くれだった長い指に私の指を絡めて、その温かい胸に顔を
寄せる時、私はこの身に流れた血を呪うのです。貴方と私の間には、
大きく深い溝があると。

でも、どうしてでしょう。

それでも良いと思ってしまうのは。

このひと時を過ごし、語り合うことができるなら、いくつもの罪を
負い、罰を受けることも厭わない。

私はただ、貴方の側にいたいだけなのですから。

「チトセ、チトセ」

え、あ。ヤベ、寝てた。

將軍の声にはつと顔を起こすと、サインしていた書類に点々と水が
落ちた跡があった。

よ、よだれ！

うわあ、仕事中に居眠りしてた所か、書類によだれまで落としちゃ
ったよ！

ど、どうしょ！

ごしごしと口元を拭うあたしに、將軍は違う違うと言って自分の目
元を指した。

「眠りながら泣いていたよ。悪い夢でも見た？」

「は、いえ、覚えてないですけど」

むー？ 夢なんて見たんかなあ？

全然覚えてないんだけど。

將軍が差し出してくれたハンカチで、目元を拭う。

あゝ、確かに泣いてたみたいだ。

なんだか、將軍には恥ずかしいトコばかり見られてるな。

「疲れているのかな？」

將軍が心配そうな顔をして、あたしの顔をのぞき込む。

おお！ 美形のどアップ……じゃなくて！

「いえ、心配かけてすいません。ホントに大丈夫ですから」

お茶の時間まで空けてもらったのに、これ以上迷惑かけらんないしね。

將軍がちよつとため息をついて言う。

「でも、もつと俺を頼ってくれていいんだよ？」

「ありがとうございます。でもあたしが引き受けるって言ったことですし、それにそんなに頼ったら、將軍が大変じゃないですか。今だってこんなに頼りっぱなしなんですから……」

口ではたいしたことないよって言っても、やっぱり大変だと思うんだよね。

ただの補佐役ならまだしも、あたしはずぶの素人。

政治どころか、この世界についてもロクに知らないんだし。

そう言うと、將軍は柔らかい笑みを浮かべた。

「そんなことないよ。チトセの方が頑張っているじゃないか。それに俺はこんな時でなくては、国政に参加できないからね。むしろ感謝したいくらいだ」

「いや、そんなに褒められると恥ずかしいです。あたしができることなんて、ホント少ないですもん。でも、なんかもう、これって意地みたいなもんですから」

「意地？」

「ええ、そうです」

だって何の権力もない小娘が何言ったって、発言力は無きに等しいでしょ？

だったら、まあシャクだけど、王姉って立場をフル活用して、役に立つトコ見せて、影響力をつければいいんじゃないかと考えたワケですよ。

あの天使の皮を被ったワガママ自己中で人の話を聞きやしねえ魔王陛下を黙らせるのには、それくらいしなくちゃでしょ。

まあ、ちよつと時間がかかりそうだけど、絶対還るって決めたし。だってあたしには、日本の文学をもつとグローバルにするって野望があるんだからね！

ビバツ古典！ ビバツ文学！ ああ！ 文字って偉大な発明だね！
って、げふげふ。ちよつと興奮し過ぎました…… すいません。

「え、まあ、そういうワケなんで、どうぞお気になさらずに」
につこりとごまかすように笑いマース。

どうかさっきの痴態は忘れてくだサーイ。

あつ、怪しい外国人風の発音になっちゃったのは、ご愛嬌ってことにしといて！

「……じゃ、仕事しようか？」

「そうですね」

將軍が置いたビミョーな間を、あたしは怖くてツツコめませんでした。
た。

しゃつと、最後の一枚にサインをし終わる。

羽根ペンなんて代物、現代日本ではまず使わないから、これで書けるようになるまで、ちよつと苦労したんだよなあ。

そう思いながら、ペンをペン立てに戻して、書き終えた書類を將軍に手渡す。

「はい、お疲れ様。今日の仕事はこれで終わりだから」

將軍が書類の最後の一枚をチェックし終えて、そう言った。

「ふあい」

あゝ、疲れたあ。

手首痛いし。書類の書き過ぎで腱鞘炎とかなったらイヤだな。

IT革命って、ホントに偉大だったんだね。

まあ、ノートをとるのは手書きだけど、レポートなんかはもうパソコンだもんな。

「大丈夫？ チトセ」

「大丈夫ですよ。座りっぱなしで、ちょっと体が固まっちゃいましたけど」

ああ、美形のお兄さんに心配されるのって、ホントに嬉しいことだなあ。

思わず疲れもふっとんじやうよ。

將軍は書類を片付けながら、窓の外を見て言った。

「もう夕暮れだね。どう、チトセ。喉渴いただろう？ お茶でも頼もうか」

將軍とお茶！ とつても魅力的な提案だねえ！

うー、でもなあ。

「すいません、將軍。ちょっと先約が……」

「また陛下の所かな？」

「いえ、宰相閣下の所です」

意外な人名だったんだろう、將軍が軽く驚いた表情かおをする。

まあ、あたしとジューターの兄さんは、仲良しこよしな間柄じゃないからね。

意外な組み合わせに思えんのかな？

「フェイ卿の所に？ 何でまた」

「ほら、あたしって体はキュレオリアですけど、魔力のコントロールが出来ないじゃないですか。それで宰相閣下にコントロールの仕方とか、教わってるんですよ」

「ああ、そういうこと」

將軍は納得したようだ。

「でも全然上手くいかなかった」

「フェイ卿の教え方は厳しい？」

「まあ、あの宰相閣下ですからね」

万年不機嫌男ですよ、相手は。

もう一ヶ月が経つけどさ、まだ一回も笑ったトコなんて見たことないよ。

あたしがそう言つと、ピロッツ將軍も見たことがないらしい。
とんでもないことを言う。

「彼とはもう、五十年くらいになるけど、見たことないなあ」

「五十年でつて、スゴイですねえ」

色んな意味でな。

つと、こんな長話して遅れたら、また兄さんに小言をくらうよ！
急がないと！

「す、すいません。あの、そろそろ行かなきゃなんないんで」

「うん、頑張つてね」

「はい」

ああ、励ましてくれる人がいると、やる気も違うよ。

しかもそれがカッコイイお兄さんだったりしたら、もう最高だね！
もう、槍でもビームサーベルでも、どんと来いつて感じだからね。

第14話

「まずは精神を鍛えるべきだ」

と、万年不機嫌男こと、ジュートル「フェイ宰相閣下は仰いました。魔力というものは、暴れ馬だと思え。それを御する手綱が精神力だ。いかなる時も冷静でなくては手綱は緩み、力が暴走してしまう。いいか、一番大事なのは平常心だ。平常心を養え」

はい、それは分かりますよ？ 理屈はね。

でもさ！ その修行で頭の上に腐った卵を置くってどうよ！ あり得ないでしょ！

だって腐った卵だよ！？ いくら小さなクッションを置いたって、卵なんだよ！

しかも腐った！

「あのっ！ 宰相閣下！」

「何だ？」

ジュートの兄さんが『無駄口叩いてる余裕があんのかよ、アーン？』って声で聞き返してきた。

もつと愛想よくすればいいのにねえ。折角、顔と声はいいんだからさ。

まあ、兄さんにしたら余計なお世話だろうけど。

あたしは正面を向いたまま、背筋をピンツと伸ばして、頭上の卵を落とさないように気をつけながら尋ねた。

「何で腐った卵なんですか！ この間まで普通のボールでしたよね！」

あのっ、ホントに恐ろしいんですけど！

ただの卵だって十分怖いのに、その頭に「腐った」ってついちゃうんだよ！？

まだ外側は平気だけども、割ったら確実に腐臭が広がるって！
槍でもビームサーベルでもどんと来いって言いましたけど、腐った

卵はマジで勘弁してください！

あたしは必死でそんなことを訴えたのに、兄さんはワザとらしく「はあ」とため息をついた。

「あなたは一月も同じ修行をしていて、何故進歩がないのかを考えないのか。それはあなたに緊張感が欠落しているからだ。適度な緊張感は神経を敏感にする。よって割れやすいものを選んだ」

「でも腐ってる必要ってないですよね……」

「それは要らぬものを有効活用しているからだ。この間グレンフィビスが大量に卵を生んだといって、城に献上されたは良いが、陛下から一兵卒に至るまで、三食卵料理を四日続けたが、結局余ってしまった。ただ捨てるだけではもったいないからな」

そんなことまで気にするんですか、宰相って……。

意外とみみっちい？

「グラルフェ……何とかって何ですか？」

「グレンフィビスだ。まったく“グ”と“フ”しか合っていないだろうが」

ジューターの兄さんが大げさにため息をつく。

どうもすみませんね！ あたし、カタカナは苦手なんですよ！

でも兄さんのいいトコは、呆れながらもちゃんと説明してくれるトコだ。

こういう基礎知識的なことや、魔力関連のことはきちんと教えてくれるんだよね。

「グレンフィビスというのは、鳥の一種だ。飛べないが好戦的で、極彩色の羽を持つ。主に卵と肉を食用にするな。羽も飾りなどに使われることもある」

「鳴き声はコケッコーとか、クックドウドウルドゥーとかだったりします？」

あたしは極彩色の鶏にわとりを想像した。

美味しいのかなあ。

あゝ、焼き鳥食いてえ。ねぎまゝ、つくねゝ、皮ゝ、手羽先ゝ、ね

ぎまゝ。

あたしは塩よりタレ派です。炭火焼きなら、なお良し。

「コケ？ グレンフィビスの鳴き声は『そんそおぎゃおゝす！』だ」

「……ぷっ」

うわあ、何か微妙な泣き声だな、オイ。むしろ吠え声？

怪獣じゃあるまいし。

しかも宰相閣下のモノマネ付きだしさ。

多分、本物のグラ……何とかの鳴き声を再現してくれたんだろうけど、はつきり言って笑える。

だってあのジューターの兄さんが、『そんそおぎゃおゝす！』って吠えるんだよ？

一瞬、頭の上の腐った卵が傾いた。

ヤバッ、動いちゃダメだ！

笑うな、あたし！ 笑ったら異臭騒ぎだ！

ピクピク動く腹筋と頬に力を入れて、必死に堪える。

心頭滅却すれば火もまた涼し！

心を穏やかにすれば、どんなに面白い笑えることだって耐えられるはずだ！

吸ってゝ、吐いてゝ、吸ってゝ、吐いてゝ、吐いてゝ、

吸ってゝ。

「ふう」

何とか堪えられた。

何だ、あたしだってやれば出来るじゃゝん。うんうん。

あゝ、良かったあ。臭いのはヤダもんね。

そう、その油断が命取りだった。

あたしはその瞬間、ヤツのことを失念してたんだ。いつも唐突にやつてくるヤツの存在を。

「姉上ッ！」

ぐはっ！

いつものごとく気配を感じさせず、すっかり油断していたあたしの腰に、タツクルかましやがった魔王陛下。

バランスを崩すあたし。

あたしの頭から滑り落ちる腐った卵。

ちやっかり自分の周りだけ結界を張る宰相閣下。

あたしの頭から滑り落ちた腐った卵は、万有引力により、床へ向かって落ちていく。

そして次の瞬間。

「うわっ！ マジでくっせえ！」

マジでヤバイよ！ 目にしみる！ 息できないし！ っていうか、したくない！

恐るべし、グピ……なんとか！ たった一つで生物兵器並みの破壊力だ！

鼻がひん曲がるような臭さとは、まさにこのことだって！

「臭いよう、姉上」

「テメエの所為だろうが！ ボケ！」

どさくさに紛れてしがみついてくる陛下をはったおしながら、罵倒する。

敬語とか嫌味とか嫌がらせとかも全部吹っ飛んだよ！ もう嫌だ！

こんな生活！

絶対帰ってやる！

グ……何とかの腐臭が蔓延する室内で、あたしは決意を新たにしたのでした。

第15話

はあはあはあ。

あまりの臭さに耐え切れず、あたしは部屋の外に逃げ出した。

腰のあたりに、まだお荷物がへばりついてたけど、そんなのにかま
つて余裕はハッキリ言ってない。

いや、ホントに。

あれだよ。何をおおげさなとか、思っただけで済むであろう、そこ
のあなた！ 甘い、実に甘い！ チョコレートケーキの上に生クリ
ームをのせて、粉砂糖をかけちゃうほど甘い考えだよ！

あの臭さは体験した者じゃなきゃ、絶対解かんないって。

まあ、強いて例えるなら、一年風呂に入っただけでオッサンが、ヘド
口が溜まってそうなのドブ川で水浴びをした後、くさやと納豆とニン
ニクを食べて吐いた息に、なおかつ生ゴミの腐臭をブレンドしたよ
うな、感じ？

もちろん、そんな臭いを今まで嗅いだことなんてないけどさ。

イメージだよ、イメージ。それくらい臭かったってコト。あんな体
験は二度とゴメンだ。

「姉上、大丈夫？」

「大丈夫なわけあるはずないでしょう。何でいきなりタックルがまし
てくるんですか？ ワザとですか？ ワザとですね？ いつもいつ
もいつもいつもいつもいつもいつも！ 腰痛めたらどうして
くれるんですか？ 若い身空でギックリ腰とかシヤレにならないん
ですけど。大体、陛下はあれですね、人の話を聞かなさ過ぎですよ
ね。世界の全てが自分中心に動いているという天動説でも信奉して
らっしゃるんですか？ 世界は私の為にあるとでも思っただけで済
むんですか？ 自分にそうなる値打ちがあると思っただけから、そん
なことが出来るんですよね？ でもそれって自己中にもほどがある
と思いませんか？ ああ、思っただけならそうはなりませんよね。すみま

せんでした。じゃあ言い方を変えます。今すぐそのことを自覚してください。そしてあたしを元の姿に戻して、元の世界に帰らしてください、っーか、むしろ帰せ、ボケナス」
はぁ、はぁ。

ここまで一気にまくしたてました。

うーん、ストレスって溜め込むと体に悪いからなあ。

ただでさえこの一月、ストレスたまる生活してるってのにさ、さらに追い討ちをかけるようなことを、なんでまたしでかしてくださるんですかね、陛下は。

何だか言いにくそうに下向してるけど、同情なんてカケラもしませんよ？

「あのね、姉上。お話があるの」

おーい？

ホント、人の話は聞きましょうや。何で、そこで自分の話になるかな、オイ。

「……あたしの言ってることが分からなかったなら、もう一度言つて差し上げましょうか？」

ノンプレスでな。

「ううん、姉上のお話は分かったよ。つまり元の姿に戻して、元の世界に帰せつてことでしょうか？」

「そうです。今すぐ帰してください」

「でも、僕は嫌だし」

オイ、コラ。

「それにね、僕のお話の方が大事だから」

「……あたしの話は大事じゃないって言ってますか……」

「えへ」

えへじゃねえぞ！ えへじゃ！

頬を染めてもじもじすんな！ それでも百六十歳か、ワレ！

「それで？ 陛下のあたしの話より大事な話って何ですか？」

腹の底からひつくーい声を出してやる。

しかもいつもは浮かべないような極上の笑顔付きだ。

「うん、あのね……」

普通にスルーしてくださる陛下が、あたしは大っ嫌いです。

「姉上？ 聞いている？」

「カケラも聞いてません」

けっ、聞けるかつつの。

あー、あなたがそんな怒った顔したって、まったく怖くないですよ。すねたように睨んでも無駄だって。

美人さんが怒ると怖い法則は、もっと大きくなってから適用されるもんですよ。

今は可愛い子はいくら怒っても、全然怖くない法則が適用中だよ、アンタは。

「もう、姉上！ とっても大事なお話だって言っただよな？ ちゃんと聞いてよ」

「ハイハイ」

まあ、一応聞いて差し上げますわ。あたしにとって有益な情報かも知れないしね。

「本当にちゃんと聞いてね。とっても大事なお話だからね」

「分かってますって」

しつこいなあ。

「あのね、今ね、ちょっとお城の中がゴタゴタしちゃっているの。

派閥争いみたいのが出来ちゃってね。僕も治めようとしているのだけれど、水面下で動かれると中々難しくて。でね、その中で姉上を利用しようとしている輩がいるって情報が入ったの。まだ詳しい出所が分からないから、特定を急いでいるのだけど……。姉上、絶対一人にならないでね。あと、あまり親しくない人と二人つきりとか、大勢対一人とかにならないように気をつけて。大丈夫？」

「分かりました。気をつけますよ」

あー、あたし最近張り切っちゃってるからなあ。ちと裏目に出ちゃったカンジ？

陛下が“姉上”に執着してるのは、皆知ってるもんね。

そういう輩が出るのは、むしろ自然な流れかもな。

うんうん、どの世界のどの時代でも、権力って魅力的なのね。

まあ、あたしは権力とか、どうでもいいけど。

「本当に大丈夫？」

あ、何さ、その疑わしいものを見るような目は。

あたしにだって、それくらいの知識はあるんですからね。

権力争いの醜さは、古典の世界にだってあるんだからな。

「大丈夫ですってば、陛下。キチンと気をつけますよ。あたしだって利用されてポイントとか、絶対にイヤですもん」

どうせなら、あたしが利用する立場に立ちたいよ。面倒なことは嫌いだけどな。

「本当に本当に？」

「本当ですってば。あんまりしつこいと、あのベレッタヒッピーの腐った卵を食わせますよ？」

「姉上、あれ、グレンフィビスの卵だよ」

「……そうとも言いますね」

すいません。とうとう一文字も合わなくなりました。

第16話

あゝ、何か、ホントにスンマセン。
ちよっとアレですよ。

しくじった？

あはは、まあ、そういうこともあるさ、うん。

小難しいマナーに毎回てこずる豪華な晩餐の後、見事に捉まりました。

脂ぎったオツサンたちに。

「よい夜でございますな。王姉殿下」

「そうですね、キットカット大臣」

「私の名前はキッチンエカツです、王姉殿下」

「あら、ごめんなさい。懐かしい何かと混同していたようです」

うん、あのサクサク感がたまらないヤツ。

「このような所で、いかが致しましたか」

「少し夜風に当たろうと思ひましてやって来たんですよ……ヌーボ

ー大臣」

「ヌーローです、王姉殿下」

「ええ、そう……ヌーロー大臣」

「しかし奇遇ですなあ、麗しの王姉殿下と直にお話ができ、大変嬉しゅうございますよ」

「そうですね、サツポロポテト大臣」

「サツテポロンです」

「ごめんなさいね、サツテポロン大臣」

うん、ちよっとヤバイよね。

コイツら、あまり評判が宜しくないらしい、大臣たちらしいし。

部屋に戻って、本読んでたら、小腹が空いちやって、何か頼もうと思つて呼び鈴鳴らしても誰も来やしねえから、ちよっとそこまで出てきたら、ね、こうなちゃったワケで……。

ぶつちゃけ、ピンチ？

しかしコイツら、あたしのこと馬鹿だと思っただろうな。

全員見事に名前間違えたからね。

これがナイスミドルのオジサマだったら、絶対一発で名前覚えるのに……。

カツコイイ人や美人なお姉さんの名前は、スグ覚えられて忘れない。我ながら都合のいい記憶力ですこと。

「所で、ここで会ったのも何かの縁でしょう。少しお話致しませんか？」

脂ぎったオッサンその一がさっと、庭園の方を示した。

何？ あっちでゆっくり座ってお話しましょうってコト？

絶対嫌です。お断り。

でもねえ、そう簡単に言えれば、楽だけどね。

まあ、仮にも王姉殿下とか呼ばれちゃったら、下手なこと言えないんだよね。

好きでやってるワケじゃないけどさ、一応それで衣食住を保障してもらってるワケだし。どうしたもんかなあ。

つか、こんなことになったと知れたら、またジューターの兄さんの大目玉を食らいそうだ。

うわあ、マジ勘弁して欲しいわ、ホント。

さっきだって、勝手に部屋から逃げたコト、こっぴどく絞られたんだからね。

兄さんタツパあるし、声だって低いから迫力満点なんだよ。

マジ怖いって。陛下の百倍怖いね。

ホントに最近運ねえなあ、あたし。

どうせ囲まれるんなら、美形の兄ちゃんか美人の姉さんの方がいい脂ぎったオッサン、しかもブサイク、しかも何か下品っぽいのかな、最悪でしょ。

「王姉殿下？　どうか致しましたか？」

「いいえ。どうも致しませんか？」

「ではよろしいでしょうか？」

「そうですね……」

あたしを暗殺したって、陛下の怒りを煽るだけっていうことは、どんな馬鹿にも分かるハズ。

危害を加えようとはしないでしょ。

コイツらのねらいは、おそらくあたしを丸め込むこと。舌先三寸や貢物、それであたしを自分たちが有利なように操ろうって腹だね。

つまりはおべっかと賄賂だ。

ここで強く拒否すれば、逃げることは出来ると思う。なんてたって、あたしの方がここじゃ身分が上だからね。無理矢理連れて行ったら、コイツらの方が不利だ。

ついでにあたしからついてった場合、あたしの立場が悪くなる可能性があるんだよね。そこでどんな取引があったかって、勘ぐられるのがオチでしょ。いくら王姉殿下とか言っても、逆賊と周りに思われちゃうかもだし。面倒なことは避けた方がいいのが本音。

うん、ここは引き下がった方が得だね。

それにこんなオッサンたちに囲まれて話なんかしたくないし。目がギラついて野心丸見え。

あとで陛下かジューターの兄さんに名前言つとけば、すぐに目つけられるでしょ。

あたしはそう考えて、王姉殿下スマイルを浮かべた。

バリバリの一般ピープルのあたしが一月かけて浮かべられるようになった、最終兵器(?)だ。

「申し訳ございませんが、お断りさせていただきます。このような夜更けに殿方とお話するのは、大変はしたないことと聞いておりますので」

色んな小説なんかで読んだ、お上品な喋り方っていうのを実践中。

しかしこれって、現代の大学生のセリフじゃねえよなあ。

あー、ムズかゆい！ あたしのキャラじゃないんだって！

こんな姿、絶対友達には見せらんないね！ お前誰だよ！ ってツ

ツコミ入るし、絶対。

まあ、そんな心情を表に出さないくらいに面の皮は厚くなったけどな。

自分がこんなに演技派だとは、思っても見なかったよ。

オッサンたちはまさか断られるなんて思っても見なかったのか、なんか慌てて相談してる。

なんであたしがそんな大人しくついてくと思ってたのかね。

そんなホイホイ後ついてくような尻軽に見えたとしたら心外だね。

まあ、美人さんだったら、ちょっと考えちゃうけど……多分。

「では、失礼しますね。お休みなさい」

いつまでも馬鹿なオッサンたちに付き合ってるほど、あたしはお人よしじゃないんでね。

さっさと部屋に戻ることにした。

第17話

無事に部屋にたどり着いて、あたしはもう一度呼び鈴を鳴らしてみた。

ちよつと待っても、やっぱり誰も来やしない。

なんかオカシイよな。

あたしはふかふかのベッドに腰を下ろして、さっきのことを考えてみた。

普段なら、ちよつと呼び鈴鳴らただけで、すぐに侍女のお姉さんがすつ飛んでくるのに、誰も来なかったから、あたしは直接出ようと思ったワケだし。

それにあのオッサンたちは、明らかにあたしを待ち伏せしてるみたいだった。

偶然を装ってたけど、それにしては態度が不自然だったね、あれはあと気になったのは、オッサンたちが誰かの指示で動いてるみたいだったコト。

相談してる声が少し聞こえたけど、『あの方』がどうのこうのって言ってた。

なんか、ヤバイなあ。っていうか、きな臭い。

あんな小物じゃなくて、もっと大物が後ろにいそくだなあ。

マジで気をつけた方がいいかも知んない。

まさか部屋まで押しかけるってコトはないとは思っけど、念のために窓とドアの鍵とまじないを確認した。

ただ鍵をかけただけじゃ、あまり効果ないらしいからね、強い魔力を持った人にとっては。

「シリアスって苦手なのになあ」

あたしって、コメディ派なんだよね。

なんでこんなコトになっちゃってんだろ。権力争いとかお家騒動とか、無縁な世界に生きてたハズなのにさ。

「これもそれもあれもどれも、全部陛下の所為だ！　ちくしょう！　何かあつたら呪つてやる！」

そんなことを叫んで、これまたふかふかの枕をぺっちゃんこにするため、ボカス力殴り、とび蹴りをくらわし、ジャーマンスープレックスホールドをキメたトコで、少しスッキリした。もちろん最後はちゃんとブリッジだ。

よし、枕もいい具合にぺっちゃんこになったことだし、これで安眠できるね。

この世界に電気なんてモンはないらしいけど、こういう仕組みだから明かりはある。

ピロツツ將軍に聞いたら、これも魔力がエネルギーらしい。

ホントに便利だね、魔力って。しかもエコだ。

あたしは明かりを消して、ベッドに入った。

某あやとりと射的が天才的な少年のようにはいかないんで、すぐには寝付けないけどね。

それでも大分うとうとしかけた時、微かな物音がした。

最初は風でしよって思った。

上空に浮かぶ城は、結界が張ってあるとかでそこまでの強風と寒さはないけど、地上に比べればそれなりに風は強い。

初めの頃は気になって眠れなかったけど、最近はもうぐっすりだ。

だから今回も気にしないで寝返りを打つ。

その時、ベッドが不自然に揺れた。まるで誰かが乗っかって来たみたいなのカンジで。

あたしは飛び起きようとして、誰かの手で口を押さえられて後ろに倒れた。

ちよつとまってよ！　まだ頭がスッキリしないんですけど！　え！

何！　どうしたの！

声を出そうにも押さえられちゃ無理だし！

「むがつ、もがつ」

暴れようとした手は、まとめて頭の上に押さえつけられた。

「大人しくしろ」

え……？ この声は……もしかして……。

暗闇に慣れた目に、目の前の男の顔がぼんやりと見えた。

第18話

ごうごうっていう風の音が、やけに大きく聞こえた。

多分、それだけ神経が敏感になってるんだと思う。

頭の中がぐるぐるして、色んな考えが巡る。

マジかよ！ に、ウソでしょ！ と、どうして！ や、ちょっとの、

ああ、っていう気持ち。

あたしは暴れるのを止めた。

この人相手に暴れても無駄じゃん？

あたしが暴れるのを止めた所為か、大声を出すなっていう条件で、口をふさがれてた手が外された。

「ふう、苦しかった。っていうか、あなただったんですね。……ピ

ロツツ將軍。でも少し軽率な行動だと思いますけど？ こんなことをしなければ、あなたに疑いの目は向けられなかったハズじゃないですか」

「チトセは、今の状況が分かっているのかな？」

將軍がいつもと同じ爽やかな笑みを浮かべた。

でもこんな時に見ると、その爽やかさが逆に嫌らしく見えるね。いい男が台無し。

「もちろん分かってますよ。あたしが襲われてるってコトでしょ？」

「それにしても冷静だね」

「まさか、とても驚いてますよ」

いや、ホントにとっても驚いてるから。驚きすぎて一回転しちゃうくらいにね。

だから表面的には落ち着いて見えるんだろうけどさ、まだぐるぐるしてるもん、頭ん中。

「でもさっきのは違うんだよね」

「は？ さっきのってどれですか？」

「俺が疑われてないっていう所だよ」

將軍の笑みが自嘲的になった。

こつちを向きながら、あたしじやない遠くを睨みながら言う。

「特に宰相閣下がね。普通將軍職は国政に関わらないから、目をつけられた。知ってるかな？ 君の侍女の過半数は俺の推薦だったんだよ」

「……人払いしたのは、將軍ですか？」

「そうだよ。でも意外だったな。君なら彼らの誘いに乗ってくれそうだと思ってたのに」

「やっぱり、あのオツサンたちの裏で糸引いてたのは將軍だったんですね。でも残念でしたね。あたしを引っかけたいなら、もつと顔のいい方を用意しとけば良かったんですよ」

「本当にね。あれは迂闊だったな。チトセが一月でここまでたくましくなるとは思ってもみなかったよ」

そして將軍はあたしの、キュレオリアの髪を一房、あたしの両手を押さえていない右手ですくう。

「なあ、手を組まないか？ 君の王妃としての立場と俺の能力があれば、あの辛気臭い宰相閣下も廃せるかもしれない。どうかな？」

「それだったら、最初っからそうしたら良かったんじゃないですか？ こんなコトする前に。それにちよつとお尋ねしたいんですけどね。戸締りはしっかり確認したハズなのに、どうやって入って来たんです？」

そりやもう、念入りにチェックしたハズなんですけどね。

鍵もまじないも、寝る前はちゃんとなつてただけだ。

「まじない？ ああ、あれも侍女に頼んでちよつと細工をさせてもらったよ。鍵なら簡単に開けられるしね。それと初めから君を誘わなかった理由だったかな？ それはチトセがああ馬鹿なキュレオリアの生まれ変わりだからだよ」

「馬鹿あ？」

そういえば、あたしはキュレオリアのコト、ほとんど知らなかったな。

死んじやった人のことって、あんまり聞けることじゃないし、特に近い人には。

でも馬鹿っていうのは聞き捨てならないね。

だって認めたくはないけど、あたしの前世だっていうし、一応今はキュレオリアの体になってるワケだしさ。

あたしが軽く睨むと、將軍は嘲るような笑みを浮かべた。
ム力つく！

「ああ、知らないのかな？ キュレオリアは愚かにも人間に恋をしてね。その人間をかばって死んだんだよ、でも結局、その人間も助からなかったんだけどね。本当に愚かな女だったよ。王姉という身分も捨てて男に走ったのだから」

「人と恋に落ちることの、何がいけないんです？」

「だって人は愚かで、すぐに死ぬじゃないか。大体長生きしても八十年くらいしか生きられない。そんなのと交わったら、誇り高い魔族の血が穢れるよ」

ホントに、將軍はそう思ってるんだろう。

血が穢れるって言った時、ホントに汚いモノを見るような目をしてた。

こんなヤツを爽やか將軍だとか言ってたかと思うと、自分の人を見る目のなさに泣けてくるね。

いくら顔がよくたって、一方的な考えしかできないヤツはゴメンだ。
「こつちの人間がどんなだかなんて、会ったことないから知らないけどね、あたしも十九年間、人間として生きてきたんだよ。そこまです人間を馬鹿にされて、大人しく黙ってるとでも思ってたんの？」

一月も側にいたのに、そんなことも分らないなんて、あまりにもあたしをなめてるんじゃない？ いい加減にしるよな。

「でもチトセ、君は賢いだろう？ 一月を過ごして分かったよ。一緒にこの国の覇権を握ろう」

「ふん、そんなに権力が欲しければ、反乱でも何でも起こせばいい。自分の手で陛下を討てば？ 將軍は武人なんでしょ？」

「それは無理だよ、チトセ。君は何故この城が浮いているか知ってるかな？」

「いつも移動して、しかも空を飛んでる城なら、外敵や逆賊から守るのに有利だからでしょ」

「うん、正解。では、こんな巨大な城を動かす動力は何だと思う？」

「は？ え〜と、この国の動力の大半は魔力。石油はないらしい。石炭くらいはあるのかも知らないけど、この国じゃ使われてない。」

一般の魔族はランプとかロウソクを使ってるんだってさ。

そもそも、電気や熱でこんなデカイ城が飛ばせるとは思わないけどね。

羽根もプロペラもないんだから。

「やっぱり、魔力しか考えられないね」

「そう。しかも魔王の魔力だ。だから代々の魔王は魔族の中でもっとも魔力の強い者になるんだよ。余剰を蓄えているから、魔王が急死しても一年くらいは大丈夫だけど、その余剰魔力を使い切ったら、この城は落ちるよ。ちなみに俺にはこの城を支えるだけの魔力はない。だから一番いい方法は、魔王を裏から操ること。その為には陛下の弱点を押さえないとね」

「その弱点があたしだっていうのね」

ちなみにこれは問いかけじゃなくて、確認。

將軍はなぞなぞを解いた小さい子どもを見るような目で笑う。

マジで馬鹿にするにも程があるうちゅうの。

「俺が欲しいのは権力だ。兄がいるから領地は継げない。腕に自信があったから表の十將軍にまで登りつめたけど、將軍は国政にまでは口を挟めない。あの大臣たちはフェイの手の者と君が言えば、陛下は信じてくださるじゃないかな。フェイのヤツを宰相の座から引きずり落とし、裏の十賢者の証を剥奪し、追放する。俺が初の將軍職からなった宰相で君が王姉。二人でこの国を牛耳ろうじゃないか。君とならきつと出来るよ。君だってもつと贅沢したいだろう？ 元

の世界の話をよく話してくれたけど、向こうではただの庶民なんだろう？ 本当に戻りたいのかな？ 戻らなきゃならないと、そう思い込んでいるだけじゃないのかな？」

第19話

將軍はこの漆黒の長い髪をすきながら、熱っぽく語る。

多分、キュレオリアが生きてた頃から抱いてたんだろ？夢物語を。でもね、やっぱり將軍は分かっちゃいないね。

あたしはワザと皮肉な笑みを浮かべて將軍を見上げた。

「そう將軍は言うけどさ、そんなに上手くいくと思ってんの？あのジューターの兄さんが黙って追放されるワケないじゃん。それに魔王陛下がそんなウソに騙されるような可愛い性格してるってマジで信じてんの？んなワケあるかっての。そんな中身も可愛かったら、あたしはとくに元の世界に還ってるよ。あの人たちにや、可愛げのカケラもありやしないよ、特に政治に関してはね。そんなこと、会って一月のあたしより、長い付き合いの將軍の方がよく知ってると思ったんだけど、あたしはあんなのこと、どうやら買いかぶり過ぎてたみたいだね。あーあ、野心だらけの男ってやだね。自分の都合のいい風にしか考えられないヤツは特にな。悪いけど、あたしはそんなに権力に飢えたりしてないもんでさ。むしろ気ままな一般ピープルの方がいいや。王姉殿下スマイルって、顔疲れるんだよね。お上品な喋り方はムズがゆくなるし。あたしはそんな柄じゃないってさ。大体、この世界にはテレビもパソコンも漫画おもないんだよ。この世界もいい所たくさんあると思うけど、あたしはあつちの世界も好きなの。そりゃ、いいトコばかりってワケじゃないけどさ。そんなに捨てたもんじゃないって思ってるからね。つまり、答えはノー。分かる？あたしは協力しないよ。やるなら一人でやるんだね」

「断るというのか？」

「そうだよ。將軍は大人しく部屋を出てくべきだと思うけど？これ以上罪を重ねても、いいことは一つもないでしょ」

將軍は信じられないって顔をする。

彼の辞書には、権力を欲しない者は皆愚か者って載ってるんじゃない

いの。

そんな偏った辞書なんて、使いモンにならないと思うけどね。

「……致し方ないな」

「ちよつ、何すんだよ!」

將軍があたしの体をまたぐ。

今までは左手であたしの両手を頭の上に押しつけてはいたけど、將軍の体は横にあつたんだよ。

いや、でもつ、ちよつと待てや! これつてもしかして、貞操の危機つてヤツですか!

「なあ、チトセ。考え直さないかな? チトセは顔がいい男が好きだろう? 言うことを聞いてくれたら、手荒な真似はしないよ?」

將軍はそう言いながら、右手で弄んでいた長い黒髪に唇を落とした。はつ、今更そんなキザなマネされてもね。

「乙女の部屋に不法侵入した時点で、そんなこと言う資格はないんだ、よつ!」

今だ!

あたしは右足を思いつきり振り上げた。

つしゃあ! 手ごたえアリ! クリティカルヒット!

あたしの両手を押さえつけていた左手が離れた。

將軍は股間を押さえてうずくまつてる。

はつはつはつは。いくら魔族とは言え、そこはダメでしょ。

女をなめると、痛い目に会つてことを学習するんだな!

あたしはその隙に將軍の下から這い出して、ベッドから転げ落ちた。

念のため近くにあつた椅子を持ち上げて、將軍に投げつける。

けどそれは將軍の数十センチ手前で何かに阻まれて砕け散った。

「げっ」

ヤバッ、結界つてヤツ?

逃げなきゃ!

くるとドアに向かって猛ダッシュ。ドアノブに手をかける。

つて、ちよつと待て! また開かないんだけど!

ドアノブがビクともしない。

くそっ、またか！

「無駄だよ、チトセ。かけた者しか解けないまじないをかけたからね」

その声はすぐ近くから聞こえた。

振り返れば冷たい眼をした將軍が立っていた。

声の調子は変わらなくても、そこに感じる温度は絶対に低い。

「なるほどね、あたしは袋の中のネズミってワケ？」

「そう、そして俺がネズミを捕まえる罠をしかけた魔族様だよ」

「ふん、猫じゃないの？ 権力って大きな魚を身の程も知らずに獲るうとしてる猫」

ぐあはっ。

いきなり首を絞められた。

くっ、息が。

「お前はやはり愚かだな！ いくら生まれ変わろうとも、その愚かさだけは変わらないらしい！」

何か言い返そうにも、首を絞められちゃ、息をすることすら難しい。

ヤバッ、落ち着け、あたし！

ジューの兄さんの言葉を思い出せ！

集中！ 目の前にあるモノに意識を集中させて、一気に開く感覚！

ざわりと長い黒髪がうごめく。

せめて意識が続いてる内に、コイツを叩きのめさなきゃ気がすまない！

あたしの意識が途切れるのが早いか、コイツを叩きのめすのが早いか。

うう、段々目がかすんできた。

その時、直接脳に響くような声がした。

「

上手く聞き取れなかったけど、それと同時にまた魔力が暴走を始めた。

つーか、嵐？

周りのものが舞い上がって、追跡装置でもついてるみたいに將軍目がけて飛んでいく。

あたしの首を絞めていた將軍の手が離れる。

そして、あたしの意識は深い底に落ちていった。

第20話

そこは真っ白いトコだった。

目の前にいるただ一人を除いて、そこに色はない。

「やつほー、チトセ！ 初めまして、かな？」

「あんたがキュレオリア？」

「うん、そう。キューちゃんでもレオちゃんでも好きなように呼んでね。」

ちよつと待て、こんなにテンション高いキャラだったのか？ キュレオリアって……。

大人しそうな外見してるクセに。何か力が抜けるなあ。

「……あんた、さっき何か力貸したでしょ」

「うん。だって絶体絶命の大ピンチだったじゃない？ 普通はああいう所でカツコイイ王子様とか従者とかが助けに入るのが王道だと思うんだけど、それも望めなかったんだもん。ちよつとくらいならいいかなあって」

「いいかなあって、オイ。あんた、ずっと見てたワケ？」

「まさか。ずっとじゃないよ。ビューが私を起こそうってした時かなかな？」

「それって、ほぼずっとじゃん。つーか、何で出てこなかったのさ。陛下はあんたに会いたがつてたんだよ」

「あはっ、そうみたいだね」

「あはっ、ってあんたね」

「だって、私もう死んじゃってるんだもん。もう四十年も前にね。今はチトセが私の魂を持つてるワケじゃない？ 私はそんな出しやばりじゃないもん」

「ふん、あっそう。つーか、あんたがああワガママ自己中を育てたんでしょ？ 一言、文句言わせてもらっからね」

「うーん、ごめんねえ。でもビュー、普段はしっかりした子だよ？」

「……知ってる」

いくらあたしに会いに来て、公務だけは絶対手を抜かないって、ジューの兄さんが言ってた。

そしてキュレオリアが、ちょっと困ったような顔をする。

「結局、私がビューを捨てちゃった形になるしね。いくらビューが魔王になった後とは言っても、なつてからの方が寂しかったと思うし、何度謝っても足りないくらい、悪いと思ってるよ」

「それでもいい、恋だったの？」

「うん。私は後悔してないよ。権力なんかより、あのひとの方が大事だったんだもん」

「相手、人間だった？」

「うん。旅人でね、行き倒れてた所を私が見つけて、地上の別荘で看病したの。その後はもう、恋に落ちるってこういうことなんだって思ったくらい唐突にね、好きで好きでたまらなくなっちゃって、でもすごく悩んだんだよ。私は魔族で、しかも魔王の姉でしょ？」

「これでも結構魔力強いんだよ。寿命は多分、あのひとの何十倍もあったと思う。結局、二人して死んじゃったけど。あのひとね、東の人間の国の王弟だったんだって。兄王に追われて、この国まで逃げて来たけど、追っ手に見つかっちゃってね。次に生まれ変わる時は、あのひとと同じ人間に生まれたいなあって思ってたなら、本当に人間に生まれ変わっちゃって、起きた時びっくりしたもん」

「……いいの？」

「何が？」

「だから、ホントにあんたが表に出なくて」

「やっだなあ、チトセったら。いいって言ってるでしょう？ それにあのひとがいない世界に生きてもしようがないもん。このまま何度も生まれ変わってたら、きっとあのひとにまた会えると思うんだ」
「そう言うキュレオリアの目は、キラキラ輝いてて、なんか眩しい。ちよっと羨ましいいかな、あたし。」

「私はチトセと同じ魂だけど、同じひとじゃないよ。核が同じだけ。」

ビューもそれを分かっているとと思うよ。自分を捨てた私より、きっとチトセのことが大事だよ、今は」

「それ、微妙に嬉しくない。あたしはこっちも嫌いじゃないけど、帰りたいんだってば」

「うーん、ビューの姉としては、残念って言うておくね。って、そろそろかな」

「は？ 何が」

「あのね、私は本来は眠ってるっていうのかな？ そういう状態なの。なのに無理矢理起こされちゃって、一つの魂が二人の人格を動かすのって負荷が結構かかるのね。魔力も私が使っちゃったし、そろそろまた眠る時が来るの」

「お別れってコト？」

「だから違うってば。私はチトセの中にいるから。でももう出てこないよ。多分、私が眠ったら姿も元に戻るんじゃないかな」

「ホントに？」

「うん。あれは私を起こそうとして、私が拒否したから体だけ起こされちゃった状態なんだもん。あつ、そうそう。一つ、チトセに頼みごとしたいんだけど、いい？」

「内容によつてはね」

「大丈夫だつて、そんなに難しいことじゃないもん。手紙をね、渡して欲しいの。今チトセが使ってる部屋の、白い鏡台のひきだしの奥にあるから。それをビューに渡して欲しいんだ。四十年前、渡せなかった手紙」

「オツケ。分かった。渡せばいいんでしょ？」

「有難うチトセ！ じゃ、そろそろ眠るね。最後にチトセと話が出て来て良かったよ。ふつつかな弟だけど、よろしくね！ 根は悪い子じゃないから！」

「ちよつ、待てや！ コラ！ 消えるな！ よろしくねじゃねえだろ！ オイ！」

「あははははは、ばいばいきくん」

「いや、マジであんたが起きたのはあの時か！　だつたら何で、いつもあんぱんにコテンパンにされてるばいきん野郎の捨てゼリフが言えるんだ！？」

うおっ、引っ張られる！　っーか弾き跳ばされる！

白の世界がぐちゃぐちゃに混ぜた絵の具みたいに歪んでるじゃん！

ぎゃああああああ！　目が回るし！

うえ、気持ちわるっ！

第21話

ふっと、意識が浮上する感覚。

気持ち悪さを堪えて目を開けると、陛下のどアップがあつて、マジでビビった。

「あ、あ、あ」

「あ？ 何？ あんぱんでも食べたいんですか？」

「姉上！」

「ぐはっ」

「良かった。姉上が無事で本当に良かった！」

ちよっと待て！ 苦しいから！ マジで苦しいから！ んな抱きつくな！

毎度毎度同じコト言わせんなよな！ あんたの力は普通の五歳児並みじゃないんだっつーの！

「気がついたか」

「あ、宰相閣下」

陛下に抱きつかれながらも、何とか体を起こすと、いつもに輪をかけたように不機嫌なジューの兄さんがため息をついた。

「あ、宰相閣下ではない。かなり派手にやったようだな」

「え？」

あー、こりゃひでえや。

大型家具があつちこつちにちらばってるわ、壁に大穴開いてるわ、もうぐつちやぐちや。

もしかしないでも、これやったの、キュレオリアの魔力だよなあ。

「……弁償とか、しなきゃダメですか？」

そんな金、持ってないんですけど……。

そういうと、兄さんはまた大きなため息をついた。

「そんなことは気にせずともいい」

「そうだよ。姉上が無事だったのだから、それだけで十分だよ。こ

めんね、もつと僕が気をつけていれば、こんな目に会わなくてすんだのに……」

ああああ、またそんな涙浮かべて。

君主がそう簡単に涙なんて見せるもんじゃないって。

大体、もう百六十歳なんだからさ。

「別に、そんな気にしなくても大丈夫ですよ。結果オーライってやつです」

いくらかはあたしがもつと気をつけておかなきゃなんなかったコトが原因だったし。

なおも抱きついてくる陛下をひっpegし、寝間着の裾を払う。

そして目に入ってきたのは、長い黒髪じゃなくて、肩口までの茶髪。キュレオリアの言った通りだったみたいだね。

う、キュレオリアの服、胸の辺りがゆるくて、腹が苦しい……。何かムカつくな。

久しぶりの自分の顔を、倒れてる鏡台のひび割れた鏡に映す、何だか気恥ずかしいもんだ。

つと、そうそう。

白い鏡台ってコレだよな。

よつと。

ひきだしを全部引っ張り出して、散らばった中身の中に、黄ばんだ封筒を見つけた。

まあ、四十年もこの中に入ってたみたいだし、元は白かったんじゃないのかね。

宛名は“親愛なる弟、ビュレフォースへ”。

裏にはキュレオリアのサインが入ってるし、コレで間違いないな。ハイと手渡した手紙とあたしの顔を、陛下は交互に見る。

「姉上？」

「そう、コレ、陛下の姉上から」

「え？」

「だからキュレオリアから、陛下に宛てた手紙を渡してくれるよう

に頼まれたんですよ」

「姉上が……」

陛下はその手紙をじっと見つめてた。

結局、あたしはその手紙の内容は知らない。

けど、まあ、多分それは他人が知っていいことじゃないんだろうと思う。

第22話

そして、その後の顛末を少しだけ。

まず、ピロツツ將軍のことからかな。

將軍はキュレオリアが魔力で壁に大穴開けた音で駆けつけてきた兵士たちに取り押さえられたらしい。

まあ、彼らが駆けつけてきた時には、あたしも將軍も氣絶してただけだね。

処遇はまだ決まっていけないけど、かなり大きな計画を立ててたらしくて、彼の仲間たちも続々と捕まってる。

ちなみにこれはあのお菓子に似た名前のオッサンたちが吐いた情報による。

將軍は一切口を開かず、黙秘を続けているみたい。

国外追放か終身謹慎か。死刑にはほんの少しだけ、罪状が足りないらしい。

普通こういう中世っぽい世界だと、反逆者は皆死刑のハズだけど、この国にも死刑反対論者が結構いるとのこと。

まあ、あたしも死刑にはして欲しくないと思ってるからね。

將軍のしたことは許せないっていうより、馬鹿げてたと思うから。その辺は司法の手に委ねられるでしょ。

ジューターの兄さんは相変わらず不機嫌そうな面して、忙しそうに仕事してる。

一斉検挙したヤツの穴埋めとか、後任とか、あとこまごましたことが色々。

それでも合間をぬって、またお菓子を作ってる姿は、悪いけどやっぱり笑えるよ。

エプロンが世界一似合わない男の称号を贈りたいね。

あゝ、あとは、陛下？

アレも相変わらずだね。姉上姉上ってマジうるさい。

でも時たま、あたしのこと、チトセって呼ぶようになった。

その代わり、自分のことはビューって呼べってうるさいんだよ。

あと敬語禁止令が発令中。

まあ、そう簡単に言うコト聞いてやるような可愛い女じゃないんでね。

未だに陛下って呼んでマス。

そして迎えた元の世界に戻る日が今日だ。

こっちに来てから苦節一月と十四日。

こうして数字として見ると短いけど、結構濃い一月ちよつとだったなあ。

絶対、現代日本じゃ味わえないような経験ばかりだったからね。

したくてしたワケじゃないけどさ。

楽しくなかったって言えば嘘になるのかな。

ジューターの兄さん他、お世話になった人たちには、もう別れの挨拶は済ませた。

召喚魔術って、代々の魔王にしか伝えられない秘術とかで、

他人がそこに立ち会うことは出来ないんだって。

あ？ 何で陛下があたしを元の世界に戻す気になったかって？

なんでも、自分が未熟なばかりにあたしを危険な目に合わせたから、もつとしっかり国が治められるようになるまで、自分の世界で待ってて、とか勝手なことをぬかしていやがりましたけどねっ。

なんでこっちに帰ってくること前提で話すかね、あれは！

ホントに自己中だなあ、オイ。まあ、もう、慣れちゃったけどさ。

「準備できた？」

「え、まあ、ね」

そつと部屋のドアを開く。

半壊させちゃった部屋はまだ修理中だから、寝泊りしてるゲストルームで着替えた。

何でも時空を渡って来た時となるべく同じカッコの方が、還りやす

いんですと。

でも、ねえ、来た時のカツコって言ったらさ、高校時代のジャージに前髪がウザイからって、パイナップルみたいに結んでるっていう、絶対人前にや出られない姿なんですけど！

うつつ、恥ずかしい！

あまりに恥ずかしいから、頭からすっぽり白いシーツを被って出た。後姿は、某毛が三本しかないお化けのようだよ。

あー、このネタが分からないお嬢ちゃんやお坊ちゃんは、お父さんかお母さんに訊くように。

「ねえ、チトセ。やっぱり帰ってしまうんだね」

あたしが召喚された魔方阵がある城の地下への道すがら、ぽつりと陛下が呟いた。

「つか、あたしにはこのカツコをツッコまないアンタの方が気になるけどな。」

「仕方ないでしょ。あたしが生まれたのはあっちなんだし。それにこの国じゃ、多少なりとも魔力がないと生活すんのが大変なんですよ？」

あたしはもう身も心もただの女子大生、尾上 千歳でしかないから、もう魔力なんてないハズだもんね。

「あ、あのね、チトセ。それがそうでもないみたいなの」
「はあ？」

陛下がまた変なことをほざき出したんですけど。

だからそんなもじもじすんなつつーの。

「言いたいことはハッキリ言え、ハッキリ」

「うん、じゃあ言うね。確かにチトセの身体は外見は元に戻ったけど、一度引き出された魔力はそのままになってしまったみたいなの。身体はまだ人間に近いけど、このままだと……多分あと五年くらいで、身体も完全に魔族化してしまうと思う」

「……ちよっと待て、それって……つまり……どういうコト？」

スンマセン。あんまり理解したくないんですけど、その言葉の意味。

脳が理解するのを拒否ってるよ。己防衛機能つてヤツ？

「ん、具体的には歳をとるのが遅くなったり、ちよつと身体が丈夫になったり、魔術が使えるようになったりかなあ？」

「マジでえ！？」

「うん、マジで」

「うっそ！ 何ソレ！ あり得ないんだけど！

「それって、向こう還つても有効なワケ！？」

「多分。だって世界の理ことわりとかに関係ない身体に直接起こった変化だから」

「……ねえ、魔力を封じる方法とかないの？」

「ないよ」

「んなさらつと言っな！ さらつと！ ホントはあんだろ！ 隠し立てするとヒドイからな！」

あたしがそう言つと、陛下はその可愛らしいお顔に満面の笑みをたたえた。

しかもイジワルな笑みだ。

初めて見る顔にあたしは嫌な予感を覚えたよ。むしろ悪寒か？

「な、何さ」

「うっん。ただ例え仮にそんな方法があつても、きつと教えないと思つて」

「はあ？ 何でさ。一国の王がそんなケチくさいコト言っんじゃねえよ」

「だってね、チトセが魔族になつたら、こっちに来るしかないでしょう？ チトセのいた世界は人間が支配しているんだっていうからね。それとも、向こうでこそこそ隠れて、あちこちを流転する生活を送りたい？」

こ、こ、コイツ！ もしや確信犯か！

くそつ、コイツの頭を思いつきし殴りてえ！

でも今殴つて機嫌損ねたら、還してくれなくなるかも知ないし！

我慢、我慢だ、尾上 千歳。

例えいつか時の流れが違っちゃって、こっちの世界に来なきゃなくなっても、今はあの世界に還りたい。
向こうでやりたいことはたくさんあるんだからな！

第23話

陛下に案内されてやって来た地下室は、記憶通りに陰気がかび臭い。「もっと綺麗にすればいいじゃん。金はあるんでしょ……ぎゃっ」うへっ、またガサゴソいつてるよ！

まさか黒光りしてるアレが出るんじゃないでしょうね！ 他にも茶色かったりするアレが！

陛下が魔方陣のチェックをしながら答える。

「でもこちらの方が雰囲気出るから。いかにもって感じでしょう？」
雰囲気かよ！

って、ひいつ、何アレ！？

「あ、そっちの方は魔術の道具だから、触らないでね」
変なモノばかりが並んでる棚に、いわゆるしゃれこうべを見つけて、ちよっとビビった。

もっと平たく言うつと髑髏どくろ、正しくは頭蓋骨か。

暗くて陰気がかび臭い地下室で見ると、かなり怖いよ。

つか、何でこんなモンがあるんだ？ まさかホンモノじゃあるまいな！？

……深く考えるの、よそう。

うん、何か取り返しがつかないことになりそうだ。

「チトセ、準備できたよ」

「う、うん」

地下室の床には、畳二畳分くらいの魔方陣がチヨークみたいで描いてあった。

「あ、チトセ。魔方陣に入る前に、これをあげるね」

そう言つて陛下は自分の指にはめてた指輪を、あたしの中指にはめようとした。

「きつとチトセのことだから、向こうに還つたらこちらのことを夢だったと思うでしょう？ だからちゃんとこちらのが現実だ

「つたつて証拠をあげるね」

ちっ、あたしの性格見破られてるよ。何か、シャクだな。つて、いたたたたたた。

「無理矢理はめようとすんな！ どう見ても指の太さ違うだろうが！ まず外見五歳児がしてた指輪を、十九のあたしにはめようって考えが無理なんだよ！」

試しに小指にもはめようとしたけど、絶対無理だね。入らないって。痛いっつってんだろ！」

「だって……」

もう、そんなコトで泣きそうな顔すんじゃないよ。つたく。

あたしは陛下が持ってた指輪を受け取った。

「向こう着いたら、チェーンでも通してネックレスみたいにしたら、それでいいでしょ？」

それまでは握りしめて、絶対離さないから。

陛下は袖口で顔を拭って頷いた。

「うん。じゃあ、始めよう。チトセ、円の中心に立って」

「ハイよ」

それまで被ってたシートを取って、言われた通り、魔方陣の真ん中に立つ。

やっと還れるんだ。日本に……。

近い内にあたしは向こうの世界に相容れない存在になる。

でもそれまでは、一生懸命生きたろうじゃないの！

「じゃあ、行くよ？ 準備はいい？」

「モチロン」

陛下があたしには聞き取れない、呪文みたいのを唱え始める。

それと同時に、ビリビリしてきた。

何だかこう、ひっぱられて、力を貯めてるような……。

「じゃあ、また会おうね、チトセ」

「じゃあね……ビューー」

しばらくはお別れなんだし、特別サービスだよ。特別！

だからそんな嬉しそうな顔すんなっつーの！

こっちが恥ずかしいだろ！

「はっ」

「うおっ」

気合の声と同時に、あたしは宙に放り出される感覚を味わった。

ぎゃあ！　かなりの加速度だよ！

何だっけ！　こういうの！　え〜と、え〜と、あっ、あれだ！

逆バンジー！

来る時垂直落下式スリルライドで、帰る時は逆バンジーかよ！

あり得ねえ！

すぽーんとかを抜ける感覚のあと、気づけば自分の部屋のパソコンの前に、あたしは何事もなかったみたいに座ってた。まるで長い夢でも見てたみたいに。

でも、やっぱりあれは夢じゃない。

何しろ、あたしの手の中には、例の指輪があっただからね。

目の前のパソコンはスクリーンセイバー画面だった。

おつかしいなあ。あたし、一月も行方不明になってたんだから、とつくに電源切られてていいハズなのに。

あっ、もしかして……。

あたしはネットにつながってることを確認して、現在日時を調べた。

「……やっぱり」

あたしがあっちに行ってから、まだ六時間くらいしか経ってない。

あれか！　異世界ファンタジーお約束の、向こうとこっちじゃ時間の流れが違ってる法則！

ははは、なんだあ、そっか。一月もどこに行ってたのかって、問い詰められなくて良かったよ。

ちょうどその時、カーテンの隙間から光が射し込み始めた。

おう、夜明けか！　久しぶりに浴びる日本の朝日は格別だね！

ん？　……ちよっと待て、今日があの日だってことは……。

「レポート提出日じゃん！」

ヤバッ、あと何時間！？ しつ、資料！ ワードファイル、どれ！？
これ、落とすワケにはいかないからね！ 単位は大事！ 全力で書き上げるぞ！

さて、元魔王陛下の姉、今大学生で、もうすぐ魔族の底力、見せてやろうじゃないの！

あたしは猛烈な速さで、キーボードを叩き始めた。

そして……………。

第24話

「ぎゃふ」

つつ、痛つてえ。

こ、この感覚、二度目だよ。

垂直落下式スリルライド。ただし安全バーも座席もないバージョン。別名召喚とも言う。

実に六年ぶりだね。また見事に着地に失敗して、腰打ったし。

「チトセ！」

「おう……つて、誰？」

この美少年と美青年の中間くらいの、一番オイシイ時期の美形さんは。

尻餅ついてるあたしに手を伸ばしながら、その美形さんが笑う。

「あれ？ 分からない？ 僕だよ、ビュー、ビュレフォース」

「ええつ、陛下！？」

うつそお！

立ち上がったあたしより、拳二つ分くらい背の高いこの美形さんが、あんなあたしの腰ちよつと上くらいまでしかなかった陛下！？

魔王の陛下は百六十歳で外見五歳児だった。

じゃあ、あつちでは六年しか経ってないけど、こつちの世界は一体何百年経ったのさ！

あんぐり口を開けて見上げるあたしを、陛下は頭からつま先まで見回して言う。

「チトセは全然変わらないね」

「あ、当ったり前でしょ！ 向こつじゃ六年しか経ってないんだから！」

「へえ、そうなんだ」

「へえつて、あんなね！」

こつという人を食ったような所は全然変わらないな！

あたしは怒ってるのに、陛下はくすくす笑う。

「たく、ますます腹立つな！」

「こつちじゃ大分経っちゃったから、チトセがお婆さんになってるんじゃないかって、ちよつと心配だったんだけど、杞憂きゆうだったみたいだね。まあ、僕は例えチトセがお婆さんでも、全然構わないけど」
「うわあ……」

甘っ、何その砂吐きそうなくらい甘いセリフ！

めっちゃ痒い！ あたしダメだわ！ こういうの！

何気に引き気味のあたしを気にせずに、陛下はちよつと困った顔をする。

「何さ」

「うん。あのね、こつちの都合でチトセを呼んでしまったけど、大丈夫？」

へえ、そういうコト気にするようになったんだ。

前はそこそこ、まったく無頓着だったからな。少しは成長したじゃん。

「ん、まあね。いずれこつちに来なきゃなんないってことは分かってたし。いつこつち来てもいいように、手紙書いてあったから」
その手紙は分かりやすいように、あたしがいつも使ってる棚のひきだしに入れてある。

何とか助手として残れた大学や、家族や友達にはいきなりの失踪で迷惑をかけるかも知れないけど、少なくともそれは自分の意思だつてコト、伝えなきゃだし。謝罪と感謝の言葉を、自分の言葉で綴ったつもり。

まあ、魔力だとか魔王だとか、そんなコトは伏せたけどね。絶対信じてもらえないって。

結局、こつちのコトは誰にも言わなかったしな。

いつも首からチェーンに通した指輪を提げてたら、結構詮索されたけどね。意味深に笑っておいたけど。

「でもさ、あたしこつちに来て、今度は王姉って立場ないから、

まず住むトコと仕事探さなきゃね。陛下、何かいい物件と仕事ない？」

そう尋ねると、陛下は不満気な顔をする。

「城に住めばいいよ。仕事もしなくていいから」

「そんなワケにはいかないでしょ！ 少なくともあたしは嫌だね、そんなの。タダ飯食いなんて真っ平ゴメンだよ。そんなコトになるんだったら出てってやるから」

「だ、ダメだよ！ それじゃ呼んだ意味がないよ！」

「じゃあ、紹介しなさいよ」

「……分かった。ジューに空いてる城の仕事ないか訊いてみるよ」

「あ、そうそう。ジューの兄さん、元気？ ついでに今、外見いくつくらい？」

爺さんになっても、あの人はカッコよさそうだけど。不機嫌な面は健在かね。

「元気だよ。宰相として頑張ってくれているし、作るお菓子は美味しいし。外見？ 人間でいうと……ええと、四十代半ばって所かな？」

へえ、まだ菓子作りしてるんだ……。四十代半ばのナイスミドルがエプロン姿でお菓子作り……。それは是非とも拝見しないとね！

「さあ、陛下、さっさとこの陰気な地下室から出よ？ こんなトコに長時間いたら、カビ生えちゃう」

「また陛下って言った。ビューって呼んでって言うのに……」

「聞こえないなあ。何か言った？」

「あの時は呼んでくれたじゃないか」

「まったく何も聞こえませーん」

地上への階段を上りながら、あたしはワザとそう言った。

あの時は特別サービスだったんだってば。

背後からむっとした気配が伝わってきたけど、振り返って何かやらないもんね。

第25話

「ぎゃあ！」

いきなり背後から抱きしめられて、階段から落ちそうになる。

「何すんだよ！ 離せ！」

「えゝ。だってチトセってば、全然再会を喜んでくれないのだから僕はこんなに嬉しいのに」

ますますぎゅっと力を込めてくる。

けど苦しくはない。どうやら手加減も覚えたらしい。

でも、いきなりなトコは変わってねえな！

「離せってば！ 階段でふざけちゃいけませんって、小さい頃教わらなかったの！」

「……ちえ」

はあ、やっと離してくれたよ。油断も隙もあつたもんじゃないね。再び階段を上り始めたあたしの背中に、陛下が問いかけてくる。

「ねえ、チトセはまだ僕のことを弟だと思ってる？」

「相当手のかかる、ね」

あたしは階段を上りながら答えた。

あの時は弟だなんて認めてないつもりだったけど、後から考えたら結構弟扱いしてたかもだし。

「僕はもうチトセと姉上と一緒にしてないよ」

あたしの後ろをついてくる陛下に、あたしは振り返らずに答える。

「あつそう。だから何？」

それが普通なんだってば。

「うん、だからこれから僕とチトセの新しい関係を築いていきたいと思うんだ」

「へえ？ 何？ 君主と家臣？ ペットとご主人様？ それとも友人関係？」

大穴で罪と罰、あるいは愛と誠とかってね。

「違うよ。あのね……」

ボソリと耳元に囁かれた言葉に、思わず足が止まった。

振り返って、あたしの数段下にいて視線が同じ陛下を睨みつける。

「はあ？ あんた熱でもあるんじゃないの？ もしくはとち狂った？」

「まさか。僕はいたって健康だし、正気で本気。チトセがいう所のマジ、かな？」

「……マジで？」

「だからマジで」

うわあ……なんつーか、恥ずかし過ぎる発言なんですけど。顔が熱くなるよ。

何！ この展開！ ココまで王道どころか獣道もいいたコ走ってき
といて、何でココでいきなり王道な展開になるかな！

ちよつとどうなってるんだよ！ マジで！

固まってるあたしの横をすり抜けて、陛下が上に上る。

あたしに手を差し伸べながら、陛下は不敵に笑って言った。

「僕は諦めが悪いから、覚悟してね、チトセ」

あたしは大きなため息をついて、その手を取る。

フリをして思いつき叩いた。

ベチツつといい音が地上と地下をつなぐ階段に響く。

「ふん。あたしがそんな簡単に落ちると思ったら大間違いだからな」

「それでこそチトセだね。落とし甲斐があるよ」

はああ、今思えば、あの小さい陛下はまだ可愛げがあったな。

精神は外見に比例するって言ってたけど、大分ふてぶてしくなっちゃってまあ。

手をさすってる陛下の横をすり抜けて、あたしは階段を上る。

地上への出口は、もうすぐそこだ。

始めは唐突に告げられた、魔王サマがあたしの弟だって。
でももう彼はあたしの弟じゃないつもりらしい。

じゃあ、これからはどんな関係に？

少なくとも、そう簡単には、陛下の言う通りの関係になんかなってやらないけどね。

え？ あの時陛下に何て言われたかって？

アレをあたしの口から言わせる気なワケ？ 無理無理。つか、絶対やだ。

だって口にするのは恥ずかしいし、言ったらホントにそうなりそうで怖いしね。

だからそれは、皆様のご想像にお任せしますわ。これからの展開もね。

まあ、退屈だけはしそくないってことは、予想できるけどさ。

そんなワケで、また機会があつたら会いましょ。未来のコトなんてまだ分かんないけどね。

皆様、Good-bye！ 再見！ さようなら！ ついでにば〜

いば〜いき〜ん

また会う日まで！

番外編「本日の閣下」第1話

宰相閣下の優雅な一日は、日の出と共に始まります。

山の端に太陽の頭が少し出たのと同時に、パチツと目を開ける様は、まるでからくり人形のようなのですが、閣下はまだ独身でいらつしやるので、その恐ろしさに気づく者は他にありません。

節約をむねとする宰相閣下でいらつしやいますから、朝の身支度などは、当然全てご自身でなさいます。

ちなみに朝餉は専属の料理人が腕を振るうのですが、パンだけは毎日閣下が前の晩から準備をして焼かれるのだそうです。

そのパンは魔王陛下の食卓にまで並びます。

閣下付きの料理人がそのパンの製法を、どうにかして会得した暁には、そのパンを売ってぼろ儲けしようと企んでいることを閣下はご存知ありませんが、まあ、それはどうでも良いことでしょう。

それほど閣下がお作りになるパンは、美味しいということです。

さて、閣下が朝餉を終えられて執務室に向かっておられると、広い廊下の向こうから、もの凄い剣幕でやって来る人影がありました。その人物は閣下の姿を認めると、怒鳴りながら駆け寄って来ます。

「あつ！ 居た居た。ちよつと兄さん！ アレ、どうにかしてよ！」
「……お早う」

朝っぱらからうるさいのが来たな、と閣下は思いになります。が、とりあえず朝の挨拶をなさいました。

しかし相手は駆け寄って来るなり、いきなり閣下の胸倉を掴んで前後に揺さぶります。

「兄さんから嚴重注意してよね！ ホント嫌なんだから！」
「止める」

閣下は相手を刺激しないように、やんわりとその手を外し、ため息を一つついて、だいぶ背丈の違う人物を見下ろして仰いました。

「挨拶をされたら、返すのが礼儀だろう」

「おはよう！　つかホント聞いてよ兄さん！」

兄さん兄さんと呼ばれています。彼女が閣下の妹ではありません。それどころか、外見ならば父娘ほども離れています。

ついでに実年齢で言えば、確実に数十世代は違うでしょう。

まあ、人間年齢換算では、ですけどね。

「まったく。少しは落ち着いて話したらどうなんだ、チトセ。また陛下が何かなさったのか？」

チトセさんは不機嫌な顔を崩さずに頷きました。

そして地獄の亡者がうめいているような低い声で訴えます。

「朝起きたら隣で寝ていやがった」

「……そ、そうか……」

閣下はすつと目をそらされました。

こういう時にどんな言葉をかければ良いのか、分からなかったからです。

それは娘に初めて彼氏が出来たと聞かされた父親の反応に似ていないでもないですね。

しかし閣下の態度を見て、どんな想像をしたのか気づいたのでしょう。

チトセさんはむっつりとしながら言いました。

「ちよつと、変な想像しないでよね。まだやられちゃいないってば」

「……頼むからもつと婉曲な表現で言ってくれ」

「何言ってるの。もう五百五十近いクセに」

はん、とチトセさんに鼻で笑われてしまいました。

閣下は大きなため息をついて、首を振ります。

「私にどうしろと言うんだ」

「だ・か・ら、どうにかしろつつってるの。具体的に言えばアレをあたしの視界に入れないようにして」

「出来ると思うか？」

「やってよ」

「この間教えたまじないはどうした？」

「一応あれでも魔王陛下でしょ。んなモン役に立ちやしない」

その切り捨てするような口調に、自分も役立たずといわれたようで、閣下はこっそり傷つかれました。

「しかし、何故そこまで陛下を嫌う？ チトセは顔が良い男が好きなのではないか」

閣下は理解出来ないという風に、首を傾げます。

チトセさんが不細工などでもいい男の名前は、すぐに間違えたり忘れたりするくせに、顔が良い者の名は、どんな複雑な名前でも一度で覚えるということをご存知だからです。

そして魔王陛下は比類なきお美しさを誇る御方。

美形好きと自他共に認めるチトセさんが、何故陛下を厭うのか理解に苦しむ所です。

チトセさんは「あのねえ」とため息をついてから言いました。

「言つとくけど、あたしは目の保養として美形が好きなの。男女問わずね。別に面食いつてワケじゃないんだよ。だから付き合うなら別。大体近くにあんなキラキラしたヤツがいたら、あたしが余計にかすむでしょ。あとすぐにベタベタしてくるトコが嫌。はつきり言つて、うつとうしいんだよね。小さい時はまだ可愛げがあったけど、今はカケラもないしさ。人のベッドに勝手に入ってくる神経なんて、絶対理解出来ないし、したくもないよ。ここがアメリカだったら、絶対に訴えてやる、ストーカーとしてな。で、半径何百メートル以内に近寄っちゃいけないって判決出してもらいたい。切実に。まあ、他にも色々あるけどさ、つまりはタイプじゃないってコト。分かっただ？」

「あ、ああ」

びしつと鼻先に指を突きつけられ閣下は、女の容赦のなさを改めて思い知った気がなさいました。

番外編「本日の閣下」第2話

「……で、当の陛下はどこにいらっしゃるのだ？」

気を取り直して、閣下はチトセさんにお尋ねになります。

チトセさんは肩をすくめて答えました。

「さあ？ とりあえずベッドから蹴落として、着替えるからって追
い出して、ドアから出たらまた面倒なことになるから、こっそり窓
から飛び降りて来からさ」

こちらに来て一年になるチトセさんも、だいぶ魔力の制御方法を覚
えてきたみたいです。

しかしその主な用途は、魔王陛下から逃れるためのようですが。

「あ、チトセ。 こんな所に居たの？」

噂をすれば、なんとやら。

魔王陛下がチトセさんのやって来た方からやってらっしゃいます。

それを見たチトセさんは、

「げっ、じゃあ兄さん、あとよろしく！」

と言に残して、一目散に反対方向へ駆け出して行きました。

それを見送った閣下は、腹を決めて振り返りました。

そこには、先ほどからバチバチどころか、グサグサと刺さるような
殺気を醸し出している魔王陛下のお姿がありました。

「お早うございます、陛下。 今日もいい天気ですね」

会話に困った時には、天気的话题を出せばいいのです。

しかし残念ながら会話の奥の手は、陛下に通用しませんでした。

「お早う、ジュー！。 ねえ、一つ聞いてもいい？」

「何でございましょう」

「どうしてチトセと話していたの？」

陛下は笑っていらっしゃいますが、目は全く笑っていません。

大抵のことでは動じない閣下も、背中に嫌な汗が流れるのが分かり
ました。

「いえ、たいしたことではございません。偶然会って、朝の挨拶を交わしていただけですの」

「ふうん。ここはチトセの部屋から大分離れているけれどね。仕事場に行くにも通らないでしょう？」

「そういえば、そうでございますね。散歩でもしていたのではありませんか？」

一時は焦ったものの毎度のことなので、閣下はすっかり立ち直してとぼけます。

亀の甲より年の功。

宰相なんぞを長年やっていると、面の皮も厚くなるというものです。まあ、こうして朝のひと時は過ぎて行きました。

しかし、閣下の一日はまだ始まったばかりです。

この程度では終わりません。

魔王陛下は政に私情（まごころ）を挟むような方ではありませんが、休憩時間には、閣下の淹れたお茶を飲みつつ、愚痴をこぼされることもあります。

「ねえ、ジューター」

「はい？」

「どうしてチトセの職場は、執務室（しごと）の近くではないのだろうね」

この一年近く、毎日のようにくり返されてきた陛下の問いに、閣下は内心、

（またか）

と思いつつ、お答えになります。

「この城内で空いていて、且つチトセに合った職場がたまたま書庫だっただけでしょう」

「……僕の秘書官でも良かったのではない？」

実は閣下も陛下から圧力を受けて、チトセさんに秘書官にならないか、と打診をしたのですが、彼女は、

『はっ、冗談じゃない。あんなのと四六時中一緒にいたら、絶対神

経持たないって」

と言って、頑として首を縦に振らなかったのです。

しかしそんなことを陛下に言えるはずもなく、閣下はもっともらしい理由をでっちあげました。

これも毎度のことですから言い慣れたもので、すらすらと出てきます。

「秘書官は足りておりますよ。それに書庫係も秘書官と同じくらい、大事な役目でしょう。今までの書類を全て保管しているのですから、チトセが提案した書類分別法で、かなり書類が探しやすくなったと評判ですよ」

後半は本当のことです。

チトセさんとしては元いた世界で学んだことを、応用しているだけらしいのですけどね。

閣下はまだ不満そうにしている陛下を軽く無視して、ご自分の仕事に戻られます。

何しろ仕事は山ほどあるのですから、いつまでも陛下のお相手ばかりはしてられません。

「じゃ、さつさと片付けて、僕の方から行こうかな」

悪巧みを考えついた子どものように笑う陛下に、新たな嵐の予感を感じ閣下はそつと目を閉じました。

（……頑張れ、チトセ）

心の中で哀れな、それでもたくましい教え子に声援を送り、そして自分にもきつと回りまわって被害が及ぶだろうことを予想し、閣下は嘆息なさるのでした。

番外編「本日の閣下」第3話

幸薄い、ないすみどるな閣下の唯一の楽しみであり、息抜きなのが、午後のお菓子作りです。

服を汚さないように前掛けをつける姿は年季が入ってらっしゃいます。

しゅっと紐を結ぶ様子など、奥様方がご覧になったら鼻血ものですよ？

今日はこの間、チトセさんが作ってみせた、ぷりんというお菓子を作られるようです。

ただし、チトセさんが元いた世界とこちらとでは、食材に違いがあるので、まったく同じもの、というわけには、いかないのだそうです。

さて、用意する材料は、キテンフォーの乳、同乳を濃縮した生クリーム、グレンフィビスの卵、お砂糖、ベベラの実から抽出されたえっせんす、ウーゼン酒です。

ちなみにチトセさんはそれぞれを、キッチンブラボー、ベレッタヒッピー、ゴモラ、ウーロン、と呼んでいました。

どういう耳をしているんでしょうね、彼女は。覚える気があるとは思えません。

まあ、それはさておき、閣下の特技として、一度作られたお菓子の作り方は絶対に忘れない、というものがありまして、今回も書付など見ずに、手際よく作られております。

その脇で数人の若い料理人見習いたちが、熱心に見学していました。そう、閣下は彼らの尊敬対象、お菓子作り界の星なのです。

おそらくお菓子作りにおいては、閣下の右に出る者はいないことでしょう。

何せ、年季が違いますからね。

人間の何十倍も長生きの閣下が蓄えた作ることが出来るお菓子の種

類は、実に数千種類とも数万種類とも言われています。

古今東西の菓子を作り続け、腕を磨き、たまに新作を発案する、閣下のお菓子への飽くなき情熱は、今すぐ宰相を辞めて菓子職人になつてしまえばいいのに、と思われなくもないほどです。

しかし閣下が辞職されないのは、宰相の地位にあれば珍しく手に入るのが難しい食材でも、城に献上されることがあったり、権力によつて手に入れやすくなるからという説がもつとも有力です。

さすがは閣下。計算高くていらっしゃいますね。

おや、型に入れたぷりんを蒸している間に、もう一つお菓子を作られるようです。

実はぷりんというお菓子は、作ってから一日置いた方が卵臭さが抜けて美味しいのだと、閣下が見習いの料理人たちに説明しておられます。

へえ、そうなんですか。作りたてじゃない方が美味しいこともあるんですね。ためになります。

閣下はあらかじめ寝かせておいた生地を取り出して、形を作つてゆかれます。

どうやらハバンナという焼き菓子のようです。チトセさんはくつきーだと言っていました。

蒸し終えたぷりんを魔力で稼動する氷室に入れて、ハバンナを焼き始めると、閣下は使った器具を、ご自分で洗われます。

いくら見学していた見習いたちが「自分たちが洗いますから」と言つても、閣下は首を横に振ります。

この辺りに閣下の几帳面さが現れているのではないのでしょうか。

自分の道具は自分で手入れをする。

その職人氣質に、見習いたちは更に閣下に心酔していくのでした。

お菓子作りはその過程も楽しいものですが、やはり食べてもらう時が一番でしょう。

閣下は焼き上がったハバンナを、いくつか見習いたちと味見をして、

意見や感想などを求めた後、茶道具一式と共に厨房を出られました。閣下は毎日、陛下のためにお菓子を作られるのですが、閣下の足は執務室とは別の方向に向かっています。

それは陛下がこの時間帯におられるのは、別の場所だをご存知だからです。

城のとある一角に、その部屋がありました。

重く頑丈な扉を叩くと、短い返事と共に扉が開きました。

「宰相閣下、どうぞいらっしゃいまし」

「ああ、邪魔をする」

にこやかに閣下を出迎えた人物は、初老の女性でした。

閣下がお茶時にここを訪れるのは、一年前からの日課となっているので、彼女も慣れたものです。

手際よく机の上を片付けて、閣下が用意されるのを手伝います。

「いつもすまないな」

「いいえ。ちょうど休憩時間でございますからね。チトセ以外の者は出払っておりますし。それにご相伴にあずかれるのですから、これくらいのことは致しますわ」

「陛下も来ておられるのだろうか？」

「ええ、奥にいらっしゃいます」

ちょうどその時、女性の示した扉が開き、隣の部屋から件の人物が顔をお出しになりました。

「ああ、やつぱり。いい匂いがしたから、そうだと思ったんだ」

陛下はにつこりとお笑いになると、後ろを振り返って呼びかけられます。

「チトセ、お茶の時間だよ」

「……うゝ、今行きます」

首をベキバキならす音がして、チトセさんが出てきました。そして既に用意が済んでいる机を見て、申し訳なさそうな顔をします。

「すみません。いつもここまで運んでいただいて」

朝とは打って変わって丁寧な口調で言いました。

正確に言うと、いつもは丁寧な口調なのですが、主に陛下のことに
ついて頭に血が上っている時に、口が悪くなるようです。

次いでチトセさんは中年女性の方にも頭を下げました。

「室長もすみませんでした。本来なら下っ端の私が出迎えるべきで
すのに……」

室長と呼ばれた女性は、ころころと笑いながら言いました。

「気にすることはありませんよ。それよりも執筆の方は進んでいま
すか？」

「はい、おかげ様で」

チトセさんは現在、故郷に伝わる古い書物を、こちらの言葉で書い
ているのだそうです。

それも魔力が目覚めてから得た、興味があること限定の記憶力のお
かげだと言います。

なんでもあちらで何度も何度も読み返して、一字一句残さず頭に叩
き込んできたとか。

それが一つや二つではないというから、驚きです。

もはや執念と言っても過言ではないでしょう。

彼女はそれを仕事の休憩時間や就寝前を利用して、少しずつ書き溜
めています。

いずれこちらの世界全土に普及させることが、彼女の野望なのだそ
うです。

番外編「本日の閣下」第4話

城の片隅の書庫準備室で、魔王陛下と宰相閣下と書庫室長とその部下が、仲良く机を囲んでお茶しているなど、誰が想像出来るでしょう。

他国の者が見れば、異質な光景だと言うでしょうね。

しかし魔族の上層部ともなると、あまりに長生きな為か、細かいことはどうでも良くなるみたいです。

今の所、贖身をしているという声も上がっていません。

書庫に回された予算が、今まで通りだからかも知れませんがね。

「美味しいですね、このサバナ」

「チトセ、ハバナだよ」

「……一文字しか間違っていないじゃないですか」

「チトセ、間違いを指摘されたら、素直に受け止めることが大事ですよ」

「う。はい、室長」

どうやらチトセさんは室長を尊敬しているらしく、彼女の言うことは素直に聞きます。

にこにこ笑いながらチトセさんにちょっかいをお出しになられている陛下をご覧になって、

閣下はかすかに眉間のしわが薄れています。

何だかんだ仰つても、閣下は陛下の幸せを一番願っているのです。

室長もじゃあっているように見える陛下とチトセさんを、温かい目で見守っています。

「いつも申していることですけど、いちいちこちらまで来られなくてもいいんですよ。休憩時間も忙しくて、どうせお相手出来ないんですから」

遠回しかつ丁寧に、来られると迷惑であるという意味合いを込めて、チトセさんが言います。

それに対して陛下は、子どものように口を尖らせて返されました。
「また敬語になって。使わなくていいって言っているのに。僕はチトセに会いたいから来ているだけだよ？ 邪魔しないように大人しく部屋の隅から、チトセを見ているじゃないか。それでも駄目なの？」

「駄目です。気になります」

天下の魔王陛下が部屋の片隅で膝を抱えて座りながら、じいっとこちらをご覧になっている様子を想像してみてください。気にするなと言われても、ものすごく気になりますよね？

「だって僕から会いに行かないと、チトセは僕の所に来てくれないよね」

「行く必要がありませんからね」

「会いたいと思わない？」

「は？ 誰にですか？」

「僕に」

につこりとお笑いになる陛下に、チトセさんもにつこりと笑い返して言いました。

「思いません」

「チトセのいけず」

「……抱きつかないでいただけませんか？ へ・い・か？」

「反応が冷たい……」

隣の席のチトセさんを抱きしめられたまま、陛下は意気消沈してらっしゃいます。

チトセさんと言いますと、そんな陛下を無視して、普通にハバナを食べています。

まともに相手をする余計に疲れるから、とはチトセさんの談です。

「あらあら、仲良しさんねえ」

「室長、これのどかが仲良しに見えるんですか？」

ウンザリした声を上げるチトセさん。

「見えるわよ。そう思いませんか？ 閣下」

「いや……それは……何とも言えんな……」

ふふと笑いながら同意を求める室長と、同意すんじゃねえぞと目で訴えるチトセさん、チトセさんの首筋に顔を埋めつつ、横目で圧力をかける陛下に挟まれて、閣下は適当にお茶を濁しました。

どちらに転んでも、面倒になることは明白ですからね。

まあ、大体、こんな感じで毎日のお茶会は開かれているのです。

夕餉を終えた閣下は、日記に今日あったことを、つらつらとお書きになります。

初めて城に上がった時からつけてらっしゃるので、すでにその冊数は数百冊に及んでいます。

その一頁、一頁に、思い出がたくさん詰まっているのです。

時折その日記を読み返して、ああ、そんなこともあったのだなあ、と懐かしく思われます。

特にチトセさんが来た辺りから、賑やかな出来事が続いています。心労も多いですが、楽しいこと、嬉しいこともまた多いのです。

日記を書き終えた閣下は、明日の仕込みをして、ご就寝なさいます。今日も寂しい一人寝です。

お休みなさいませ、閣下。

どうぞ、よい夢を。

そしてまた明日一日、頑張ってくださいましね。

さて、閣下の一日はいかがでしたでしょうか？

意外と普通？

まあ、人生なんてそんなものですよ。

あまり劇的なものを求め過ぎると、目先の幸せを逃してしまいますからね。

皆さんもご注意ください。

そんな。余計なお世話だなんて仰らずに。ね？

そして毎度のご注意ですが、閣下他の心の声などは、わたくしたち

の想像に過ぎません。

本心とは著しくことなる場合もございます。そのことをしっかりと留意ください。

今日の「本日の閣下」は、わたくし、『敬愛する閣下を温かい目で見守り続ける会』、会員番号一〇七、シユパンネット「タカタがお送り致しました。

明日は会員番号二八六、ベルヘゾン「ツーハンがお送ります。

お楽しみに！（大嘘）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8735b/>

あたしの弟は魔王サマ！？

2010年10月16日05時53分発行